
髪結いと姫君

羽鳥 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

髪結いと姫君

【Nコード】

N7112Q

【作者名】

羽鳥 玲

【あらすじ】

世界は『緑の手』と呼ばれる奇異な力を持つ一族によって豊かな生活を与えられていた。

『緑の手』を産む王家の末姫として生まれたサリアは王家に例を見ない黒い髪・黒い瞳を持って生まれ落ちる。『緑の手』であるイリア姫を含め、王家の人間は皆緑の髪を持って生まれるがサリアはその黒から『烏姫』と呼ばれるようになる。更にサリアが特殊なのは一代に一人しか生まれないはずの『緑の手』を持って生まれてしまったこと。『緑の手』の力は大いなる治癒能力。傷は勿論、豊穣

豊作、地殻変動を収めることすら出来る。その力は国家を揺るがすため、隠して生きていく事になる。

本物の『緑の手』であるイリアは歴代の『緑の手』に比べて体が弱く、力も脆弱なもので世界の安定を保てるほど力がなかった。そのせいで世界の均衡は王都から離れた場所から順に崩れ始めていた。それを隠れて城を抜け出したサリアは各地を巡り、力を分け与えて回っていた。だが黒い髪の『緑の手』の噂はとうとう王都までやってきてしまった。脆弱な今の『緑の手』を降ろし、サリアを新しい指導者にといい動きが……。

小鳥姫と烏姫（前書き）

気がついたらこんなに暗い内容に……。
初めはハチャメチャ王女の世直しだったはずなんですが……。

小鳥姫と烏姫

？・小鳥姫と烏姫

——グランローズの伝説は語る。

その者は女神である——

その者は樹々の彩りの髪を持つ——

『緑の手』を持つ者——その命は短く、脆弱だが全ての者を癒し、

生在る限り、周りの草木一本枯す事はないだろう、と。

私は、鳥が大好きだった。

二つの翼で広い空を自由に飛ぶ姿はいつまでもいつまでも見ていたかった。

ある日、父様にそれを伝えると部屋には籠に容れられた小鳥が届けられた。

私は違うんだと必死に訴えたが父様は全く取り合ってくれなかった。

隙を見つけて小鳥を逃がすと侍女が代わりに鞭で打たれた。翌日には新しい小鳥が届けられる。

しばらくはそのやりとりが続き、私は侍女達からも距離をおかれるようになった。

誰かを傷付けたくて言った言葉ではない。

まして誰かを傷つけるためにやったことでは絶対はないのにどうしてこうなってしまったのだろうか？

私は結局、籠の鳥を飼う事にした。

一匹を長く生かせばそれだけ犠牲が少ない事に、ようやく気付い

たから。

豊かな土地と、恵まれた安定のある気候、それだけで民の心は豊かになる。

グランローズ王国——世界の中心と呼ばれるこの国から戦争というモノが消えてちょうど二百年になる。

作物は毎年雨にも恵まれ、日照時間にも恵まれ、肥えた土地の基にスクスクと育つ。

国有地の山からは貴重な金や銀などの鉱物が豊富に取れ、国の財源は確保されているので税も低い。

何よりも人々が生き生きと育ち、働き、喜びと活気に満ちている。

この国の安定は『グランローズ』と呼ばれる一輪の薔薇と『緑の手』と呼ばれる不思議な力を持つ王族によって守られていた。

「『緑の手』が見つかったぞ！七番目の姫様だ！」

「跡継ぎだ！王妃様が早くに亡くなって心配したが、これでまた安泰だ」

王族の女兒はその代に一人、類い稀な力を持って生まれる。

その者は娶った相手を次の王とし、次の『緑の手』を産み、育てる。

そして次の代に引き継ぐまで世界の繁栄を、身体を捧げることで支えている。

具体的には、生命力を『グランローズ』を介してこの世界に分け与えること。

大きな活力を持つ『緑の手』の力を大地の精霊の化身である国花『グランローズ』に与えることでこの世界はグランローズ王国を中心に繁栄している。

そして『緑の手』が濃い婚姻を結びその血を絶やさないようにすることで、この国は外交的にも守られていた。

『緑の手』の姫の暮らし。

それは、決して民達が思い描くような王族の暮らしではない。

この『力』を持って生まれた者は生涯人間として扱われなくなるのだから。

擦り傷も、偏頭痛も、今日ぶつけた瘤も、抗えないはずの老化すらも。

触れるもの全てを癒すその手は周りには神の所業と持て囃されても、当の本人にはただの迷惑な力だったり。

この力は人間の身体を器にするには強過ぎるのだ。

今日も誰とも喋らず、誰にも触れずに一日が終わる。

『緑の手』は国の為に在る力。この力を持って生まれてきた者は、この身体を一秒でも長く生き、そして一人でも多くの子孫を残せるように努力をしなければならない。

その為には身の回りの世話の全てを取り仕切っている侍女ですら自分の身体には触れない。

触れた者が少しでも傷付いていたら自分の身体は勝手にそれを癒してしまう。

対象を選ぶ事なく癒してしまうこの力には限りがあり、それが尽きるときは命の尽きるとき。この力は個の保有するモノではなく、この世界の為にあるのだから。

それが神の総意だと国民は信じて疑わない。この世界の恵みが一人の犠牲の下に成り立っているなんて夢にも思っていないのだろう。それでもこの身体は神様の威光を示す為の道具なのだ。

この身体は生きている人形なのだ。

「クロス、そろそろ来るわ。行きましょう？」

バルコニーから自由に空を飛び回っていた浅葱色の羽根を持つ小鳥に声を掛けた。まるで鎖にでも繋がれているみたいにこの手に舞

に戻って来る従順な相棒。

自分の萌葱色の長い髪の毛はどうやったってこの小鳥の安息の森にはなれないのに。

「ごめんなさい」

数え切れないほどの懺悔は全て虚空に消える。聞いてくれる者もない。

きっと自分は前世で大罪を犯したのだ。ここは牢獄に違いないのだ。

そう思い込むことが、自身を保つ唯一の方法になっていた。

そんな自分と外界を繋げるように勢い良く部屋の扉が開かれた。

クロスを鍵の付いていない籠に戻すとゆっくりと視線をそちらに移す。

いつものように、『合図』を出して半時。

この大きな城の端から端まで全力で走ったぐらいの時間で彼女は自分の呼びかけに答えるように現れる。

「サリア、行儀が悪いわ」

「だってイリア姉様！」

はあはあと息を切らして駆け込んできた彼女は自分の末妹・サリア。

五歳離れた彼女は顔形は自分にそっくりだ。

だが彼女の髪の毛も目も闇の色をしている。彼女もまた、王家の者特有の樹々の色彩を持たずに生まれてきた異端の姫だった。

小さい頃は本当に自分の分身の様に似ていたが、日に日にお日様の光を浴びて健康的な美人に育っていく。

自分と違ったモノになっていくのを一日一日感じさせられるのだ。こんなに一緒になのに自分と違う……憎い。

それでも彼女はためらわずにこの身体に触るこの世界で唯一。自分に『生きる』事と『死んでいないだけ』っていう事実を知らしめる存在。

そんな自分の思惑なんかお構いなしに彼女は懐いてくるのに。

自分の投げ出していた手を強引に拾って包み込むように握るとキツと睨んで「やっぱり！」と非難の声を上げる。

「手がこんなに冷たくなってる！お湯を貰いましょう？姉様は身体が弱いのに無理をし過ぎだわ」

「ありがとう。でも今はサリアがいるから平気よ」

「私じゃ……………何も出来ないって知ってるくせに……」

拗ねたように呟く妹は「何も出来ない」わけではない。

彼女は本当は「何でも出来る」のだ。

『緑の手』の力は本来一世代一人。それ以上生まれた歴史は無い。母が産む子供から生れて来た『緑の手』は七番目の自分のみだつたはず。少なくともその事実を選ばれた者だという自尊心を持たせて、生きている価値を見いだせていた。

だがこの十二番目の姫。『緑の手』以外の王族から生まれた隠された『緑の手』が生まれてしまった事によってその価値すら奪われていくようで足下から崩れていった。

この——サリアの存在によって。

父は母の従妹を母の亡き後、後妻として娶った。『緑の手』も既に生まれている王家にとつてのこの婚姻は、近親婚を是とする王家の意向。時代の跡継ぎとなる王子を産む為だけの婚姻だったはず。

王子だけで良かったはずなのに、彼女は生まれてしまった。王家には例をみない色である漆黒の瞳と髪を持ち、王家特有の『緑の手』を持つて生まれてしまった異端児。

だがサリアが『緑の手』であることを知る者は自分と父だけだった。

当人と自分達二人が黙っていれば『緑の手』が二人存在している事実は隠せる。今まで後継問題も特に無く、平和的に国を治められてきたのは『緑の手』が唯一神だったからだ。

王家の崩壊を現すその子供の存在は誰にも知られてはいけない。

彼女は自分と一緒にこの国に一生繋がれて、飼い殺されていけばいいのだから。

「姉様？」

いつの間にか不安そうにサリアの黒い目が覗き込んでいた。思い耽って返事もろくにしていなかった。

すぐに安心させるように笑顔を作って彼女が手を握るのに応じた。ホッとした顔を作るこんなサリアを本当に愛おしいとも思うのだ。腹違いとはいえ実の妹で、彼女以外は腫れものに触るようにしか近づいてこない。実父ですら。

でもサリアは同じ力を持つ為か、『緑の手』の力がお互いに掛からないのだ。

お互いの傷を癒すことが出来ないのは難点なのかもしれない。

だが自分と、この妹にとってはお互いの存在だけが互いに『人間』であることを確認出来る唯一だ。

「サリア、でも私を癒して欲しい訳じゃないのよ」

「また……クロスの調子が悪いの？」

「そう。ごめんなさい。私が力を使うのを止められていなければこんな事で呼んだりしないのに……」

これは自分達にとっての儀式なのだ。

週に一度。必ずサリアを呼び出して行わせること。

サリアは「全然平気だよ！」って気丈に答えた。クロスの入っている鳥籠に近付き、サリアの美しい力は発動する。

うつすらと青白く光る癒しの力は、彼女の漆黒と相まって本当に本当に輝いている。ゴクリと息を吞でしまう一瞬。

この瞬間、真実の『緑の手』はサリアの方で、自分は紛い物なのではないかと感じてしまう。

それでも自分はさして具合も悪くない籠の鳥・クロスの治療をさせる為にサリアをここに呼ぶ。サリアも十三歳だ。そろそろこの行為の意味が分かっているかもしれない。

自分は心配性なのではない。自分はこのクロスを殺さない為だけにサリアに老いを癒させているのだ。この小鳥を保ち、次の小鳥を父王から贈らせないために妹の命を分け与えさせているのだ、と。

お陰で短命なはずのこの鳥はもう寿命をとくに超えているはずなのに何年も、小さな病氣すら掛かっていない。

憎らしいほどサリアの力は本物で、それを確認して自分の心に膿を溜めていつている。このサリアに対する醜い感情がいつか表に出てしまいかもしれない。その時は……………。

考えてしまった自分の思考を消し去ってしまいたくて、振り切るように声を出した。

「ありがとう、サリア。お茶を煎れるわ」

「私ならまだ大丈夫っ！」

「そう？じゃあこちらにいらっしやい。琴を弾いてあげる」

そう声を掛けるとサリアは無邪気に顔を綻ばせた。駆け寄ってきて彼女は自分の琴に合わせて歌を唄う。

美しい琴の音色と、美しい声は空を伝って城へ、城下町へと降りていく。

この部屋からは毎日小鳥が囀りに併せて琴の音が漏れる。

サリアと一緒に唄えば、それは更に相乗して美しいものが城下町の民の耳を楽しませることとなった。

いつしか自分は『小鳥姫』と呼ばれ、民に愛されるようになっていた。

『緑の手』である自分の守るべき民達がそれを聞き、その存在に気付けばそれで良い。

今は、それだけでも良い。

秋も深まった月明りの美しい夜。

七番目の姫の十九回目の誕生日に行われた百人斬りの武術大会は大盛況に終わった。夜に掛けて授賞式典は、厳かに進められていた。王もその戦いの見事さを称えて最強を意味する勲章を与えた。更に望みの褒美を取らせる、とご機嫌な様子で皆に宣言をする。今年

も豊作でその祝いも兼ねた武術大会だったため、気前も良くなっていたのだろう。

ほろ酔いの一同を前に、優勝者の剣士ははつきりとした口調で言った。

「この国の王政は王族の『緑の手』持つ者が国で一番強い男と結婚することで成り立っております。私は現時点でその資格がありますね？」

鉄仮面に隠れていない口許を歪めて不適に笑う。

その様に王を初め、家臣一同が酔いも醒めて身構えた。これは国を揺るがす大変な失言だったのかもしれない。だが一国の王が簡単に公的な場での発言をコロコロと変える訳にはいかない。

小柄な剣士は仮面を脱ぎ捨てて、その場で抜刀すると高らかに宣言した。

「お父様っ！その首を預からせて頂きます！！」

鉄仮面の下からは調った顔立ち、漆黒の髪の少女の顔がさらけ出された。剣先は王の首元に伸びた状態で。狂刃が王の首元に今にも迫るその危機的状況下、だがそれを見た誰もが胸を撫で下ろして安堵した。

「サリアを捕らえよ！」

王の鶴の一声で少女は丁重に、しかし迅速に捕らえられる。暴れて嫌がるのを簡単に魔法で拘束し、落ち着くのを待った。

剣士の名はサリア「グランローズ。皆も周知のおてんば姫以外の何者でもない。

「サリア！お前は王族としての自覚が足りないのだ！！こういう行事の度にいちいち駄々をこねるのはやめなさいっ！謹慎だ！謹慎！！」

「どうせ私は継承順位も持たない姫なんだから何をしたっていいじゃない！」

「父に向かつてなんとと言う口の利き方、謹慎一か月！！」

「ふんっ！そんなの大人しく謹慎なんかするわけないでしょ！」

「優勝取り消し！」

「何度でも優勝してやるっ！優勝者襲って賞品奪い取ってやる！」
覆面剣士の強さは証明済みで、あながち冗談に聞こえない暴言に一同がゾツとした。だがこの二人の子供染みた親子ゲンカは城の誰もが知っているため呆れ半分にみんな聞き流す。

王には十二人の姫と一人の王子がいる。

十二番目の姫、年若いサリアは美しい姫だ。王も自慢の姫だが、少々難あり……いやかなりのじゃじゃ馬娘で国内外にその漆黒の髪と異端の行動を準えて『烏姫』として名前を轟かせていた。

これだけ見れば家臣も頭の痛いただの我が儘姫に見えるかもしれないが、このサリア姫、実は大変な実力者で王国騎士団の直属の養成学校を武術、政治学の課程を首席で修めた天才児。密かに王の後継者へと推す声もあるくらい。

父親としては全く嬉しくない……姫としては必要のない才能に溢れている姫に育った。

いっその後継者にしても良いくらいだが彼女にはこのグランローズ王国の王になるために絶対的に足りないものがある。

この国は昔から『緑の手』と呼ばれる女の伴侶が治めていた。一代に一人、必ず『緑の手』と呼ばれる力を持つ者が生まれ、その伴侶はこの国の王となる。

王族は緑色の髪の毛を持ち、更にその瞳が緑の者は『緑の手』とされた。

いつしか『緑の手』の伴侶となる者の選定基準は『緑の手』の血を薄める事のないように、血縁の近い人間が選ばれるようになった。近年王族は女児ばかり産まれるようになり、今代に至ってはサリアの双子の兄以外全て。王の子供、更にいとこに至るまで女児だった。

遠縁の親族を含む出生をみてもめばしい跡継ぎが居らず、後継問題には王族郎党頭を悩ませていた。

唯一人の男子、王子レイニードはサリアと正反対で草食系を通り

越し、乙女系とでも言うのだろうか…？

料理をしたり、レースを編んだり、お花を摘んだり、騎士団に入らなきゃいけない年齢になってもノリクマリ交わして未だに何の勉強もしていない。

王も家臣も…誰もが本気で思う。サリアが男なら何も悩まなかったのに、と。

だがサリアには、性別以外にも問題がある。

それは王族特有の『色』。一緒に生まれたレイニードやその他の王族と異なる特徴を有していた。レイニードが萌葱のような彩りを身体に点しているのに、サリアは漆黒の髪の毛と瞳を持っていた。

その闇色を不吉だと貴族達は陰口を叩く。

それでも本人の持ち前の明るさと破天荒さは人目を惹き、国民にはいつの日からか『烏姫』と呼ばれ、（本人はそれを気にするどころか気に入っているらしい）ある意味では親しまれていた。

闇色の姫のお陰で王妃の不義すら疑われたが、双子はよく似ていた為にサリアは王族の姫として渋々認められた。

それでもまだ彼女は不吉の象徴で、王家にいる限り恥の体現と呼ばれ、飼い殺されてしまう事をサリアは知っていた。

だから彼女は今日も学び、闘う。

それは彼女の権利で、誰にも止める事は出来ない。

「本当に謹慎……………ってか！これじゃあ監禁だっつーのお！」

と、叫んだ所でこの四角いだけの部屋には誰の声も返っては来ない。

椅子一つ。ベッド一つ。ランプ一つ。扉二つ。一つの扉には鍵が掛かっておりそれが外への扉。もう一つはトイレだ。窓すらない鉄格子のない牢獄。それは王族や身分の高い者の為の牢屋で自分は度々この部屋を訪れていた。もちろんいつの訪問も訪れたくて来た訳

じゃない。無理矢理ぶち込まれたというのが正解だ。姫君の扱いとしては絶対おかしいとは思えど、自らの奇行も分かっているのだから聞き入れられない事も重々承知。

授賞式典での大暴れのお陰で姫という立場は値崩れして価値もナシ。タダの親子ゲンカも国を巻き込めばこうなること必死。剣術・武術（ついでに学問）で秀でたって、魔法の前には屈服せざるおえない事実。

今日も自分の非力さに嘆く毎日です。

それでも自分は七番目の姫・イリアのことが大好きだった。

体の弱い姉は『緑の手』という使命に従事すれば若くして命を落とすことにも成り得る。父も、政府も、みんな分かっている……それでも自分達はたった一人の犠牲を払って世界を守ろうとしてしまっ

た。あの細い身体に、あのちっぽけな存在に、全ての期待を掛けてきた。

この世界は……自分達はイリアを何度も殺しているのだ。

（私が……王になれば……）

せめて今のイリアの仕事を半分背負ってあげられるのに。次の『緑の手』を産むということだけは代わってあげられない。それでも隠された『緑の手』の力はこの為にあるのだと信じて止まなかった。

『緑の手』と王にしか入ることの赦されない『緑の間』。

それは世界を正しい方向に導く為の潔斎の間だった。その部屋でなら、誰にも見られずにイリアの仕事を代わってあげられる。グラノローズに力を与えて世界の贄になると言う役割を。

そのためには『緑の手』としてじゃなく、この国の王という立場でそこに入らなければいけなかった。

『緑の手』は一人だけ。それなのに正統血脈でもないのに自分はこの力を持って生まれてきた。それを神に与えられた運命だと思っているのはきつと自分だけだ。自分が『緑の手』を持つと知っている父やイリアですらこの力をオマケぐらいにしか考えていない。

でもこの手には確実に力がある。
強く、なろう。

全て変えていける力を手にするまで。

さて、そんな強さに憧れて毎日切磋琢磨している自分が何故簡単に幽閉されてしまうのかってトコです。

『緑の手』は全てに對しての癒しの力を持つ反面、世の理を崩して使う魔術に對しての力は皆無。イリアもそう。イリアの母もそう。自分も例外無く、魔力が零なのでした。ちゃんちゃん♪

幾ら剣術、武術に秀でて飛び道具と多勢に無勢では勝てない。

結局いつまで経ってもあの父の座る玉座には近づけていないのだ。未だに玉座に一番近いのは我が双子の兄上、レイニード王子。だがその実体は……。

「サリア、サリア」

「レン？こつち！」

扉越しに聞こえてきた声に戸を叩いて応じた。

トンと扉に何か寄り掛かる気配がする。兄、レイニードこと、レンが辿り着いたのだらう。自分もその扉に寄りかかって座った。

「開けて、くれないの？」

「開けたら僕が怒られちゃうよ」

「開けてよお」

「ダメ。サリアは少し反省してなさい」

「何にも反省なんかすることないもん！………簡単に掴まってしまったのはちよつと反省したわ。今度からはちゃんとお父様を人質に取ってから正体をばらす事にする」

「コラコラコラ！」

はあつて溜め息の漏れる音が聞こえてきた。レンは本当は聡明な兄。でも人前で馬鹿なふりをする。だからこんな落ち着いた喋り方を見せるのは自分の前でだけだ。

それ以外では後継者に選ばれたくないが為に『乙女系男子』つぶりを發揮して侍女とお花を摘みに出かけたり、シナを作ってみたり、

鏡の前に何時間も座ってみたり、薔薇の香りのお風呂に入ってみたり……時々本当にそういう趣味があるのかもって疑ったりもするけど、そのくらい徹底した芝居をやったのける。それもこれも腹違いとはいえ、『姉』との結婚という巷での非常識をやったのけようとする国の風習のせいなのだ。

せめて近い親戚筋に男子が産まれたら……年の差は出来てしまいが弟と婚姻させられるより余程二人の為になる。

「あつ！ねえ、サリア。サザンが心配してこの北塔の周りを巡回してたよ」

「ありやりや。そつかあ……誰か餌あげてくれるかなあ？」

「見た目は烏だからちよつとねー」

「烏じゃないってば！」

イリアが十歳の時に小鳥のクロスを父から贈られた。

自分も、と十歳になった時に強請つたら……なんと父は自分に黒い鷹の幼鳥を贈ってきた。まだ十歳の子供に、だ。鷹なんてすぐ大きくなる。成鳥になった時にパクリと丸呑みされたらどうしようとか思わなかったものか。

それでもその鳥は黒い髪を持つ事を悩んでいた自分を励ます為に父が考えて贈ってくれたのだった。成長する度に美しい肢体になっていく鳥。空を舞う翼の艶やかさ、その美しい黒に見惚れた自分に對して父はこう言った。

“ 緑の中の一番はどうやったってイリアだ。サリア、お前は黒の一番になれ。美しい黒はとても貴重だぞ ”

だから自分を恥じることなく、黒い鷹・ザサンと共に切磋琢磨してきたのに……父はすっかり忘れている。

『烏姫』と巷で呼ばれてるのだって髪が黒いせいもあるけどサザンと行動するせいだってことを。

「僕があげておくよ。生肉で良いんだろう？」

「そんなことレンがしたらせつかくの乙女系が崩れちゃいますよ？」

「大丈夫。僕は他の人に頼むだけだから」

「さすが！乙女歴何年？」

「まだ三年くらい？」

「人生変わったね！」

「ホントだよ」

笑ったような雰囲気伝わってきた。出してくれるような素振りはないので、ただ心配して様子を見に来たのだろう。気が滅入る前に来てくれたのは感謝した。

「サーリア、ちょっとおとなしくしてなよ。もうすぐ出られる」
「ん？」

「サーリアに婚約が決まるよ」

「はあ？私まだ十四歳！」

「王族の姫なら生まれた時に決まってもおかしくはないだろう？」

「無理！マジ無理！」

「こんな姫を貰わされる貴族が可哀想だよねえ？」

「え？……ていうかレンっ！誰よ？」

「そこまでは知らない」

「えっ！ムウーリイっ！」

自分の悪態に苦笑したような気配を感じた。

優しい兄の空気が自分は好きだ。多少の言葉遣いの悪さもこの兄の前でだけ。

破天荒とは呼ばれるが、なかなか全てを要求は出来ない。民を第一に考えるのが王族の義務で、そのために自分は『王』になりたいわけだ。

だからこそきつと素直に喋れるのはお互いだけ。

本当は自由に憧れた。『緑の手』にも『王』にも本当はなりたくない。この広い外の世界に旅するのが夢で、それが叶わないことも知っていた。

大好きな姉と兄と、この狭い世界で生きていくのは苦痛ではない。楽しくないだけ。

恋もしないまま嫁ぐのも、楽しくないだけだ。

それでもまだ納得しきれるほどの大人には成れなくて涙が出てきそうだった。

早く強くならなければ、何一つ叶えられなくなってしまう。

その『大好きな姉』ですらこの手で守ってあげられなくなってしまう。

謹慎が解けるとすぐに父への謁見が許可された。但し、正装で。嫌々ながら無理矢理にドレスアップさせられた。

最近巷で……ていうかこんなの金持ち令嬢しか雇わないだろうけど……流行ってる『髪結い』と呼ばれる魔道士が綺麗に髪の毛を結ってくれた。自分の真っ直ぐのコシのある黒い髪の毛彼らに掛ければクルンクルンのふわっふわにすることすら可能だ。

縦ロールが珍しくて巻いたその場から指に絡めて遊んだ。

「姫様っ！」

「あ……ごめんなさい」

本来の『髪結い』って言うのは、他人に触れることの出来ない『緑の手』に仕える魔道士の事だ。魔術の使えない『緑の手』に対して危害を加えないように顔に魔法の刻印を印して攻撃色のある魔術を封じた魔道士を言う。

侍女に髪を結って貰うことすら出来ない『緑の手』に対する応急処置のようなもののはずなのに、何故か巷で流行ってしまつて貴族の令嬢や成金商人の娘さん達は『お抱え髪結い』を持っていることがステータスとなっていた。

一切身体には触れずに身なりを整えていくその姿は、頭で分かっているても不思議なものだ。だが自分には好都合の流行。この身体だつて侍女に触れられてしまえば、擦り傷だろうと偏頭痛だろうと老いだろうと、触れた者が傷付いていたら治癒能力を働かせてしまう。力をケチってるわけではないがバレたら困るし、その代償となるこ

ちらの生命力はそう安くない。

出来上がりを言われて鏡に映る自分を見つめた。名も知らぬ『髪結い』にアリガトウと微笑むといつも通りにすごく困った顔をされてしまう。

『髪結い』っていう位の魔道士は、本物の『緑の手』に仕える者以外は身分が低いらしく人間扱いされないものが多いらしい。国の豊かさの反面にはこの身分差が存在した。

乞食や貧民層こそ少ないが、富裕層と平民層の暮らしは大分差がある。

何も諂うことはないのにお礼の言葉すら素直に受け取れないこの『髪結い』のように、その差に根付いているもの深い。

笑うのを止めて物思いに耽っていると『髪結い』はペコリとお辞儀をしてそそくさと退出した。

自分に流行の専属『髪結い』を付けることはしない。馴れ合いたくないと言うのもあるが、人間扱いされていない人間をこれ以上増やしたくないと言うのが一番正直な気持ちかもしれない。

正装じゃない限り自分の髪は自分で結うし、ドレスも自分で着替えるし、湯浴みだって自分でやる。だから突然召喚された流しの『髪結い』は自分のこういう王族らしからぬ態度に困惑するのだろう。身嗜みを整えるのは嫌いじゃない。でも華美に着飾るのは苦手だった。

ふわっふわに巻かれた髪の毛も作り込まれた人形の髪の毛に見えて浮いている気がする。自分は生きてるのに、『髪結い』がやってくれた所は作り物感が取れない。

鏡に映る自分を見つめてふうつ、と溜め息を吐いた。
やがて王からの使者がやってくる。

このタイミングで正装で、なんて……………理由が読めないほど愚かにはなれなかった。

いつそ自分が『緑の手』だと国民にばらしてしまえばいいのかもしれない。

そう思っても行動に至らないのは、それが何よりも不自由だと知っているから。自由になりたい自分にとっての『緑の手』という役割はただの枷にしか思えない。

それが例えイリアに全てを押し付けていることになると知っていても。

キツと玉座に睨みを効かせながら、王の前に進み出た。

自分の姿を見た家臣達は感嘆の声とも思ひきため息を漏らす。

どよめきは如何なる時も感じていた。自分の容貌は王家のそれとは逸脱している。それなら漆黒の髪の毛、漆黒の瞳がさらに輝きを増すように振る舞えばいい。自分はそれを隠さずに最高の“黒”を冠しよう。それを携える容貌は花が咲き匂いたつように人々を魅了する。それで一人でも多くの味方が付くならば……………。

父王が自分を見つめてゴクリと喉を鳴らしたのが聞こえた。

「お父様、サリアで御座います」

「よく、来た……………サリア。間違えたぞ。いつでもそうしていればいい」

「お父様がそれを言いますか？」

『緑の手』がここにもいると言う事実を一番ばらしたくないはずのあなたがそれを言っただけじゃない。家臣達は見惚れていた所から急に現実に取り戻されたような表情を見せた。

自分の言い方が小生意気で、いつもの親子ゲンカのゴングが鳴ったように見えたからだろう。多分今日はそんなケンカを悠長に眺めている場合じゃないのだ。大臣の咳払いで王は本来の目的を思い出したようだ。

「……………サリア、この間の武術大会の剣技は見事だった」

「有り難きお言葉です。お父様」

「優勝の祝いに良い縁談を用意した」

「結構でございます、お父様。私は優勝を剥奪されたので」

しらっと用意していた言葉を口にする。こんな茶番の為に男装までして優勝したんじゃない。

「サリアっ！」

「お父様、私は一生涯未婚でよいのです。私の結婚が政治的な意味合いを持つことも分かっております。でも私は十二番目の、しかも別腹です」

「サリアっ！」

「政略結婚は姉上達にお任せ致します」

とカラツと笑いながら言い切った。家臣達は口をポカンと開けている。口の悪さを重々承知しているはずの側近達すら少し顔を引きつらせていた。

周囲の反応を見て何となく気付いていたが、確信に変わった。ここには縁談相手がいるのだ。お見合い宜しくここに連れてこられたのだろうが、この調子なら向こうから辞退してくれるかも、とほくそ笑んだ。

すると自分の思惑を余所に、後ろからクスクスと笑い声と共に身なりの良い甲冑の正騎士が跪いた。

「噂に聞いていた通りの面白い方ですね、『烏姫』」

「無礼者！」

「貴女はこの名前を好んでいらっしゃるってきいていたのですが？」

「……………誰に？」

「レン王子に、です」

「レン？」

兄を『レン』って呼ぶのは親しい者だけだ。普通はレイニード王子とか、レイニード様とか。さてはアイツ……、やっぱり婚約相手を知ってたな？と、双子の兄に填められた事をショックに思いながらもその騎士を睨み付けた。だがケンカを売ってる自分の悪態にも芯のある真っ直ぐな目が返ってくる。

年頃二十二、三歳だろうか？軍人にしては随分と綺麗な顔立ち、

そして線の細さも気になった。生粋の軍人ではなく、貴族の坊ちゃん
の箔付けに騎士団に所属しているだけなのだろう。虫も殺せなさ
そうな優しそうな面持ちがそれを現している。

レンと知り合いなのも良い証拠だ。あの外面：乙女系王子レンと
腕っ節の良い騎士のお付き合いなんて想像出来ない。

口許だけで微笑んでええ、と答えた。

「私は『烏姫』です。私の縄張りを荒らすと攻撃しますよ？」

家臣と王が一齐に首を振って自分にそれ以上言つたと合図した。
が、生憎そんな大人しく聞き従うような殊勝な性格を持ち合わせて
はいない。

「私は最低でも自分より弱い人間と結婚は致しません。あなたがど
なたか存じませんがこのままお帰り下さい。さもなくば今すぐ剣を
抜きなさい」

自分のドレスの下に隠し持っていた短刀を抜いて彼に向けた。相
応の実力があるなら自己紹介ぐらいは聞いてやろう、そのぐらいの
つもりで。もちろんその場は騒然としたが、刃を向けられた当人は
全く動じた様子もなく微笑んで優雅にその刀身を摘んで避けた。も
ちろんそのままなぎ払うことも出来た。だってその手に魔力が宿っ
ていたりとかはしなかったから。ただ摘まれただけだ。

「そんな安い挑発に乗って女性に手を挙げる者の方がどうかしてお
ります。私は貴女とは戦えません」

「馬鹿にしてるんですか？私武術大会で優勝したんですよ？」

「それは剣技だけでしょう？」

痛い所をつかれて後退った。

実戦は魔法だって交えてくることも分かっている。武術大会も、
魔法有りのルールなら自分の力が端にも掛からないことも分かっ
ている。唇を噛んで彼をもう一度睨んだ。

睨んだのにも関わらず彼はキラキラと輝くような敵意のない笑顔
を向ける。

（世間知らずのお坊ちゃまはこれだから扱いにくいのよっ！）

と、自分の姫という立場を棚に上げて悪態付いた。短刀を渋々鞘に収めると家臣達が対応に困ったように父王を見る。本来こんな所で抜刀したら重罪だ。だから自分は謹慎を受けていたわけだし、だが父はそれを不問にしても彼を紹介したかったらしい。正直もう一度牢にぶち込んでくれるのを期待していたのだが思惑は外れた。

「彼はユーリールミナス。ルミナス公爵家の後継者だ」
「ルミナス公？」

王家に一番影響力のある貴族の名前に少し眉を寄せる。家臣達は一斉に自分から目を反らした。ルミナス公に逆らう者は居ない証拠だ。

ルミナスの領地は城下から遠く離れたルーンに在る。明らかに自分を城から追い出す為だと分かる婚約だ。

「もう分かっているだろうが、彼がサリアの婚約者として選ばれた」
「お父様っ！勝手すぎます」

「お前はこの国の姫だ。ずっと独身でいたら他国から断れない縁談を持ってこられることもある！その時は『結婚出来ません』じゃ済まないんだ。国の為を思うなら、素直に従え」

政治の余計な邪魔になる前に穏便な所に早く嫁げ………と言われたのだ。

泣き叫んでしまいたかった。

私はこの国から自由になりたいっ！姫なんてなりたくてなった訳じゃないっ！身分なんて棄ててやるっ！

この場では……いくら破天荒な『烏姫』でも言っではいけないことだと知っていた。

俯いて、ただ聞いてることしか出来なかった。それは死刑宣告にも等しいのかもしれない。

そして自分はこの瞬間にこの国を守りたいわけではない、はつきりそう分かった。

自分はただイリアを守りたい。レンを支えたい。
全てを棄てていけないのはここにイリアがいるからだ。イリアが

この国に根付くグランローズのようにここから動けないから自分も添え木のようにここに寄り添っている。どちらが寄り掛かっているかはもう判断出来ないくらいにイリアの事を放っておけなくなっていた。

顔を上げて、必死の面持ちで父に願ひ出た。

「お父様……………いえ、陛下。私はただ結婚したくないだけなら尼寺にでも入ります。私はやらなければいけないことがあるのでここから離れられないのです。お父様、お願いです。私の優勝の祝いに私を騎士団に入団させてください」

「サリアっ！」

「私は女を捨てて王国騎士になりますっ！王になれないのなら、イリア姉様の代わりになれないのなら……………せめてっ、イリア姉様を補佐したいのです」

イリアの名を聞いた王はそのまま押し黙った。『緑の手』である自分にイリアを補佐して貰いたいのは父王も同じ気持ちなのだろう。だが、自分を近くに置いておくことは謀反の危機と隣り合わせに生きることに同じ。だがイリアが子を成す前に亡くなれば、『緑の手』を勤められる者もこの『サリア』だけだということを父は重々承知しているのだろう。

「騎士団は……………は赦さない。サリアは、魔法が……………苦手だろう」

騎士団の任務の殆どに魔術を要することは誰でも知っている。そしてサリアが魔術を使えないことは城の人間なら誰でも知っていた。口許が震えた。自分の無力に継ぐ言葉が出てこなかった。それでも涙は出てこなかった。こういう場で泣く事は恥ずべき行為だと知っている。『だから女はダメなんだ』なんてここで言われたくない。

気付くとギョツと唇を噛み締める自分の前にユーリが腰を落とすていた。

「陛下、申し上げます。サリア様に名誉騎士を任命してはいかがでしょう？ 実際優勝した試合を見ても彼女の剣術は私も騎士団に

おいて指南を仰ぎたい見事な腕前です」

「下がれ！ユーリールミナス！」

「いえ、下がれません。私の騎士団と私の妻になる者のことで御座います」

ユーリは笑顔は崩さないのに押しの強い言い方で自分の前に膝を折った。

「どうぞ姫に名誉騎士の称号を授けてくださいませ。さすれば私、ユーリールミナス騎士団長の名に掛けて姫を補佐していきましょう」
聞き間違えかと思って頭を掻いた。

“キシダンチョウ”？？騎士……ダンチョウ？

「ええっ！！？き、騎士団長おっ！？」

「あ、はい。申し遅れました。王国騎士団総団長のユーリールミナスです」

「ヘッポコ坊ちゃんじゃないのっ！？」

「ヘッポコ？……一応騎士団の中では実力で申し上がったつもりなんですけど」

「脱ぐと、凄いです系？」

すっかり場所を弁えない発言に家臣一同がもう諦めて肩を落としました。更に空気を読まないでジロジロと見定めるように彼を見つめるとすっごい嬉しそうな笑顔が返ってくる。

「なに？」

「姫、ようやく私に興味示してくれましたね？とても嬉しく思います」

「あー、今一気に興味なくなりました」

「素直に言って下さって良いんですよ？これから長い付き合いになりますから遠慮せずにどうぞ」

「初対面なのに馴れ馴れしいです！」

スッゴイ自由に話すユーリと自分を余所に頭の整理を付けた王が顔を上げた。

「よし、サリア。彼と婚約をするなら名誉騎士の勲章を授けよう」

「えっ!？」

それは究極の選択な気がする。この変な調子の騎士団長の元で大丈夫なのかというのも心配だし、一生涯の伴侶もこの選択で決まってしまう。でも王宮に残る為にはその名誉騎士の称号はとても大切だった。

答えに困っていると嬉しそうに微笑む騎士の顔が目映った。城に残ればイリアを補佐するチャンスはやってくるだろう。

「ワカリ、マシタ」

なんだかよくわからないまま謁見の間を出ると後ろからの気配に振り返る。ユーリがついて来ていて強引に自分の腕を取った。革の感触にハツとする。

かなり油断をしていた。いつもならこんな風に直に触られる事はないのに。彼が騎士団の革手袋を着用していたことに感謝した。直に触れば何かしらの『緑の手』の力が発動してしまう筈だ。

「ちよっ…っ!？」

「このまま少し話をしましょう?」

「えっ、いや遠慮します」

「騎士団に入ってから話もしたいし」

「ひ、卑怯者お…」

「何か言いましたあ?」

そう言っただけで彼はグイグイと自分の腕を引いて回廊を歩いた。引きずられるように歩いたので決して優雅な歩行では無かったが何故か周りからは婚約をした二人への祝福の拍手が贈られる。

噂はもう城中を駆け巡っているようだ。これは後から言い訳しても絶望的かも。いつそ誰もが憧れるカップルにでもなっちゃえば良いんじゃない!

中庭の方に出るとようやく腕が解放された。訳の分からない行動

に少々やけくそになりながら腹を決めた。話をしよう、この人は自分の共犯者にしたてなければいけない。

だがすぐにそれも忘れて空を見上げた。

「あつ！クロスが……」

小鳥には似つかわしくない高い空を小さく旋回する緑色の翼。

すぐに南塔にあるイリアの部屋に戻って行く。

いつもの自分への合図だ。

ユーリの手を振り切ってドレスの裾を持ち上げるとそちらに走り出した。

「姫！」

ユーリがすぐに追い付いてもう一度手を握る。

「私も行きます。イリア様の所でしよう？」

「え？なんで知って……」

「今『クロス』って小鳥姫の小鳥ですよ？口にしたじゃないですか」

「あ……そか」

「婚約者としてじゃなくてもいいですから。ちゃんと話をしましょう。それまで私は帰れません」

真摯な目つき、握られた手から不思議な気持ちを感じた。自分とは全くの他人の彼がこの手を握る。こういうのは初めての体験だった。

王家の姫とされながらも社交の場は自然と避け、自身を磨くことしかしてこなかった。父親すら隠そうとする自分の存在価値を血統でも地位でもなく、この頭脳と武術だと言いたかったから。汗が、自分の手が熱くなるのが……伝わりませんようにと祈った。しどろもどろしながら彼の真っ直ぐな目から視線を外す。

「あの……手を……」

「繋ぐのは、嫌ですか？」

エスコートをするのは貴族なら当然だ。特に婚約ともなれば彼の義務にも近い。素手ではないのだから甘んじよう。

「南塔に…行きます。一緒にいらつしやいますか？」

「ええ。ぜひお供させて下さい」

そう言つて彼は微笑んだ。優雅な動きで跪くと、もう一度こちらに手を差し伸べた。

気恥ずかしくて苦笑しながら、その手を取った。

手を繋いで歩いて来る二人を見るまでは何も疑つていなかった。

サリアの幸せを考えれば早めに彼女の立場を守ってくれる有力な貴族に嫁ぐのが一番だ。更にその相手が本当にサリアを愛せば文句はない。

そう本気で思っていたのに…。

「レン！こら！」

いつものサリアだ。ユーリが手を繋いでいるだけで違う存在にすら見えてしまう。

ドレス姿でいる事も珍しいから知らない人間のように見えた。

心中を悟られないようにわざとらしく揶揄の言葉を選んだ。

「サーリア、姫に似つかわしくない言葉遣いはいけないよ」

「良いのよ！私は姫じゃなく、騎士になりたいんだもの！」

「コラコラ、横の婚約者が泣いてるよ」

「良いのよ。私は私で、他の人間と比べて競うつもりはないから」

そう呟くサリアの顔は研磨されるように鋭く美しかった。

誰も気付かない花であれば自分だけが慈しみ愛でながら育てるのに、彼女は小さな花ではない。揉まれて生きる事で咲き誇る大輪の薔薇だ。

泣き叫んで隣りのユーリから奪つてしまひそんな衝動を自分の腕を握りしめて押さえ込んだ。気分を変えるために無理矢理笑顔を作つて隣の男の名を呼ぶ。

「やあユーリ」

「レイニード様。サリア様は教えて頂いた通りの元気な姫ですね」
「可愛いでしょお？」

「ええ。思っていた通りの芯の強い美しい方です」

『僕が一番分かってる！』怒鳴ってしまえたらどんなに楽になれるのか…。

「大事な妹だから大切にしてくれ」

怒鳴る代わりに口にした言葉は痛みを伴った。ずっと一緒だったものを引き剥がした痛みだろう。

それを無理矢理断ち切るように、眉間にしわを寄せたままこちらを睨んでいるサリアへ余計な愛想を振りまいた。

「サリア、笑ってよ？」

「笑えない！レン、知ってたんでしょ？」

「うん。知ってたよ。だから教えてあげたでしょ？」

「あなたねっ！」

「サリア、良い縁談だよ。ユーリは間違なく公爵になるし、そうしたら公爵夫人のサリアは堂々と城に入れる」

「分かってる…」

聡い妹は言われなくても分かってる。若い彼女が納得いかないだけだ。

幾ら強がっても、夢を見ているだけの小娘だ。言葉にすることで確実にしよう。

「意地悪…」

「サリア、僕はサリアのためを思ってたの！」

「意地悪よ！だって心の整理がつくまでのちよっとの時間も待ってくれない。私…レンに言われたらそうするしかないもの」

そう言っただけで涙ぐむ彼女をさり気なくユーリから奪って抱きしめた。兄妹の美しい抱擁には下心に塗れた本心が隠されている。どうか誰も気付かないで…。

「レン、私行かなくちゃ」

「行かなくて良い」

「え？ダメだよ」

「これ以上イリアの言いなりになっちゃいけない」

「私…イリアに呼ばれてるって言った？」

「サリアが出て来るタイミングを見計らって小鳥を空に飛ばした
だろ？あんな目立つ色の鳥を何度も飛ばしてたら気付くよ」

「そんなに暇なら剣でも振ってなよ」

「嫌だよ。僕に似合わない」

「っっ」

「ともかく！行っちゃだめだよ」

「行くよ！レンには関係ない」

突き放された言い方。

サリアにとって双子として生まれた自分よりも『緑の手』のイリアの方が重きがある事実。

イリアに全てを奪われる前に、ユーリと結婚してそれなりの地位を得て少しずつ距離を作っていけば良い。

そうしなければサリアはイリアにこのまま食い物にされるだけなのだ。

「じゃあ僕も行く」

サリアは少し嫌そうな顔をした。

彼女は彼女のプライドで、イリアに良いように使われている事実を他人に知られたくないのだろう。

でも自分達は良くも悪くも双子だ。

君が命を萎ませるのを気付かないわけがないのに。

真実を見ないふりをするのも優しさなら、真実をちゃんと見定めてあげるのもまた優しさだと思うのだ。

南塔の青い扉の内側はこの城で最も美しい部屋だ。代々の『緑の手』の者がその部屋の主となり、外界との接触を断つ。外の世界が

恋しくならないように配慮された造りも、毎日居るには息苦しさを増幅させる要因の一つにしかならないだろう。特にこの部屋の現在の主のような性格の人間には枷にしかならない。

ふうーっと思を吐いて扉をノックした。返事を待たずに豪華な造りの扉を開ける。

……。

開けてからしまったと後悔した。向こうもこちらも固まって竦んでしまったからだ。

お互いにこんなに人数がいると思わなかったから。

「え？なんで？」

イリアの側に控えてこちらに視線だけ寄越すのは一つ上の姉。10番目の姫、ルシア。その隣りには彼女の専属の髪結いとイリアの髪結いが立っていた。

自分呼びつける時、イリアは他の者を寄せ付けない。それは自分の力を他の人間にばれないようにの配慮だろう。だから他の人間が居ると言うことはつまり今日の召喚は『緑の手』が目的ではないと言うことだ。

ルチアは笑顔でレンを迎え、自分を無視して部屋の中心に引つ張った。レンは唯一の男性王族。取り入るのが得策だと姉たちは自分達が生まれる前から知っているのだ。勿論その対象は『緑の手』であるイリアに対してだって同じ事。『緑の手』は後継者を産む人間だ。必ず王妃になり、必ず皇后になる。権力主義の姉姫達がイリアの周りで取り入ろうと画策しているのをイリア自身は常に冷たく見守っていた。

（だから………珍しい……）

部屋に招き入れるなんて。

更にイリアは『髪結い』を呼ぶ時も他の者を中に入れない。イリアの『髪結い』は男性で、しかも見栄えのする容姿の持ち主のため影では二人の逢引を噂する者もいる。

だから良い事だとは思う。人のいる場所で『髪結い』を置くこと

は…。

ちゃんと主従関係を示せば誤解だって解けるはずだ。

だが目の前のイリアの行動にハツとした。

本来イリアは決して他人には触れないのだ。『緑の手』の力は簡単に使ってはいけない。生命力には限りがあるからだ。それなのにイリアの白く細い腕は簡単に彼に触れる。

接触した部分から生命力のシャワーを浴びてうっとりと彼の視線がイリアに絡んだ。

『髪結い』っていうのは『緑の手』が他人に簡単に力を使わないための存在。触れずに髪を結う、身体を洗う、着替えをさせる。魔道士としては初歩の魔法。だが、『緑の手』に傷つけることの無いように肌に魔法の刻印をされた『髪結い』は『緑の手』を生かす為の道具だ。

『髪結い』が『髪結い』たる使命を忘れたら…。

艶やかに笑う『髪結い』の顔を形が変わるまで殴ってやりたかった。

だがそんなことをしたってイリアに触れる限り、その男はいつまでも美しいだろう。

キツと睨み付けるが全く怯む様子はない。何がいけないの？とも言いたげな視線。

分かっている。イリアが選んだのなら止められないのだ。

彼女が彼を愛人に望むならそれさえ叶えられてしまう。実際に『髪結い』という名の愛人を沢山持った『緑の手』は存在した。

結局自分の方から目を反らしてしまう。本人が望んでいることとはいえ、大好きな姉を徐々に殺すような行為をしている人だと思つと憎いという気持ちは消えない。

「姉様…」

「サリア、レイニードも来たのね？私の部屋に二人で来るなんて珍しい」

「あ、はい！一緒に来たいってレンが……」

「後ろの方は？紹介して下さい？」

イリアが優雅にユーリに視線を映した。

ユーリは即座に跪いて頭を垂れた。さすが王国騎士団長にして次期公爵様。その動きは美しかった。

半分が王族というその場においての動きがよくわかってる、というか。その『髪結い』が分かっていなさ過ぎる、というか……。

「お初にお目にかかりますユーリ」ルミナスと申します」

「ルミナス？公爵家の方？何かご用かしら？」

「いえ、サリア様と話の最中だったので一緒にさせて頂きました。ご挨拶にも伺いたかったので」

とユーリは微笑んだ。

キレイな横顔。自分だってイリアが『髪結い』に触れたくなる気持ちは分かる。時々『生きてる者』に無性に触れなくなる事があるから。

ギョツと拳を握って彼の生の美しさに耐えた。

「姉様、先程彼との婚約が決まったのよ」

「あら……」

とイリアは目を上げてユーリを上から下まで見定めるように凝視した。

不躰な視線にも負けずにユーリは穏やかに、美しく微笑んだ。育ちが良いってのはこういう事を言うのだろう。男性なのに優雅というのがよく似合う。

「将来、サリアは城の側に置きたいの。宜しくお願いね」

「それについては彼女と二人で話し合って決めさせていただきます」

（あれえ〜？）

イリアとユーリの間に一瞬火花が散ったように見えた。

この国の人間でイリアに冷たい人を初めて見たかも。

イリアはそれに対して不機嫌を隠さない。そわそわしながら二人を見てるとユーリの手が伸びて来た。

身体をあっさり掴み取って不適な笑みを浮かべる。

（あれえ??こんなヒトだったかな?）

拘束しているように見えるその腕はあくまで優しいものだった。ただ、その行為がイリアに対しての宣戦布告なのは分かった。

さらにユーリは続ける。

「彼女は未来のルミナス公爵夫人です。ただシンボルとして存在する『緑の手』よりも政治的に重要なポストになる。城の外れに通い続けられるかどうかは保証しかねますね。彼女に飾りの公爵夫人になってもらうつもりはありませんから」

はつきりと彼が口にした言葉が自分の心を決めさせた。

この人は、『烏姫』として見ていないんだ。一人の人間としてのサリアを確立するためにここへケンを売りに来たんだ。

レンに何を吹き込まれたかは分からない。分からないけど彼の取った手段は自分への救いの手だ。

イリアは自分を食い物にしている。あの白くて細い腕の中に捕まれば逆らう手段はない。

自由を、と願う自分と……イリアの幸せを考える自分に大きなギャップがあつて、その溝はきっと未来永劫埋まることはないだろう。でも彼はイリアの側にただいるだけの自分、ではなくイリアを補佐していける途を用意したのだ。

さつき自分が父王に訴えた言葉を正しく理解した結果だろうか？だが官職としてのユーリの立場を考えればイリアに刃向かうのは好ましくない。彼の腕の中からマントを引っ張って首を振った。

ユーリはそんな自分を宥めるように微笑む。

ああ、この人も平気な顔しながら戦つてる。今、一緒に戦わなければ結局一生籠の鳥だ。

「サリア、この人を不敬罪で追い出して!」

「イリア姉様、私はこの人と婚約致しました。彼が不敬に当たるならどうぞ私どもで処分してくださいませ」

「サリアっ!もう良いわ!あなたに頼まない!!」

悲鳴に近いような姉のヒステリックな怒鳴り声。

初めて怒らせてしまった。

でも口にすれば怒りを買うのは分かっていた。こんな風に顔色を伺ってばかりいたから伝えたい事がいつの間にか伝わらなくなってしまうたんだな。

彼女は自分達が二人で許しを請う事を望んでいたのだろう。

實際した事は…二人で颯爽と部屋を出て、大笑いして涙を浮かべた事だった。

この時に、外へいつかは飛び立とうと決めた。

この兄妹は少々難がある。

これが騎士団長として、次期公爵として、自分の評価だった。

自らがいつか仕える主としてのレイニード王子は愚息のフリした鬼才だ。時々見せる政治感覚には側にいる自分が息を吞まさせられる。それを周囲に隠している所が解せない。

自らが生涯の伴侶として迎えようとしているサリア姫のじゃじゃ馬っぷりは噂以上。姫と言うよりは噂通りに王子のように遅い。王にケンカを売っている所は結構な見物だった。

だが彼女の美德は（城の誰もが美德なんて思っていないだろうが……）遅しさではなく、その信念にある事を自分は知っていた。

ある、雨の日。

それは雨なんて生易しいものではなかった。その天災は『緑の手』が治めるこの地においては、有り得ない。

だが近頃はまるで力が足りないとかばかりに各地に起こる天災を内密に鎮めてまわる事が、王国騎士団の主な活動になっていた。

初めのうちは首都に遠い場所からだったはずが今はその差が無く、大なり小なりの災害は降り懸かっている。いずれこのままでは王家は力を無くす。

災害や冷害から国民を守る『緑の手』が意味を無くしつつあるの

だから。

そうすれば新しい時代の王が必要になるのだ。何の知恵や統治の努力も必要としなかった今までの『緑の手』任せの統治から、その地域に併せた暮らしを試行錯誤していく時代に移り変わる。

その時には必ずレイニードを立てる動きになるだろう。

彼はそれが分かっているから、簡単に現『緑の手』であるイリアの婚約者に納まつたりはしないのだ。

今は正念場だ。立てるべき主を見誤ってはいけない。

そんな事を考えながら馬を走らせた。

部下を振り分けて崩れた崖の生き埋めになっている村人を掘り起こさせる。

奥に入ってしまった者はもう無理だろう。

ある程度の自分の身は守るように、と指示して数人の部下を連れて更に奥に進んだ。

この現場を目にしている者はみんな感じるだろう。本当に、

『緑の手』は存在しているのだろうか？

この地に『緑の手』の守護は届いているのだろうか？

局地的な豪雨による被害とはいえ王都に程近い村での被害はすぐに王都に届く。

謀反が起こるにはまだ早いのだ。今の状況下ではレイニードを王にするには力が足りない。

（もう少し…）

上空を見上げて祈った。被害はまだ増えるだろう。

このままじゃ数日で一揆を起こす者が現われてもおかしくない。

（保ってくれ）

なんて、期限付きの平穏を祈る。都合の良い祈りを神はどう感じただろうか？

その瞬間、見上げた上空に迸る稲妻が崖の上に辛うじて根を張っていた木に墜ちた。

「みんな！離れろ！！」

自分の声は雨に掻き消されてあまり届かない。
気付いた数名は逃げ延びたが数名は土砂と木の下敷きになった。
数は約半数。小部隊しか引き連れて来なかった事を悔やんだ。
崖はきつとまだまだ崩れるから長くここにいるわけにもいかないのだ。レイニード王子はこの付近の地形の整備を進めた方が良いと言っていた。あの王子の先見の明を実行に移せなかった己の無力さを恨む。

必死に剣を木の下に押し入れてテコの原理で押し上げようとするがびくともしない。水を吸った木の重さと、土砂が上に積もってしまったことで助け出すのは困難になっていた。

早く離脱しないと自分達まで巻き込まれてしまう。だがまだその判断がついてしまう程非情にはなりきれず仲間達と剣を押した。

そんな中、降り注いだ白い奇跡の光は女神の光臨かと見紛う程に神々しいもの。誰もが声を失ってその様を見上げた。

一人の少女が崖の上に立ち、腕を真直ぐに天に掲げた。腕から放出された青白く淡い光が風雨が鎮めていく。

魔法というよりは神力。

あれは『緑の手』というのだと誰もが確信した。
すぐさまその少女はこちらに向かって馬を走らせてきた。

惚けていた者に喝を入れて周りの者たちを先導する。自らのやるべきことを奪われたが、やりたかった事は共通だ。

それが指導者である『緑の手』なら異論はない。
付き従うように彼女の指揮を助けてその村を救った。

不思議と重傷者は居らず、被害はかなり抑えられたと言って良いだろう。

場が収まるとすぐに去ろうとした少女に村長は頭を垂れた。

「なんとお礼をしたら良いか…」

「気持ちだけ頂きます」

「そんな訳には！せめて二、三日の滞在を！！」

「いや。その気持ちは全てグランローズ王に捧げて貰いたい。私は

その役目の端々を担ったまでだ」

とぶつきらばうな物言いと反対にまだ幼さすら残る少女の微笑みは高貴な薔薇のようだった。

まるで伝説の神の花の再臨。グランローズのように咲き誇るこの国の救世主。

誰も、何も言わずとも、その場に居た者達は一同にひれ伏した。慕うべき人間を… 忠誠を誓うべき人間を見つけたのだ。

それが本物の『緑の手』ではなく、じゃじゃ馬と噂される『烏姫』の方だと気付いた時は驚いたがそういうのも嫌いじゃない。ワクワクする、とても言うのだろうか？

本来、貴族である自分が兵を率いることですら嫌う者はいた。貴族は統治をする者で、現場でせかせか働くものではないと思ってる者が多い世の中だからだ。

彼女は末席とは言え王女だ。高みの見物をしていたって誰も責めない立場で自ら馬を走らせてその場に立ち、自分の力を惜しみなく民に与えた。

その場に居た民は本物の『小鳥姫』と『烏姫』を知らないから勝手に本物の『緑の手』と勘違いし、更なる王家への親愛を寄せる結果をもたらしている。

その性格、行動力、実力とどれを取っても彼女は指導者としての『緑の手』に一番相応しい。

それは、きっとサリアにとって一番酷な事実なのだろう。

良くも悪くも、この妙な次期公爵とは一緒に過ごすことが多くなつた。

騎士団の演習も然り、イリアの元へ行かなくなった分の時間も然り。

婚約者なんだから当然と言えば当然で、そして居心地が悪くない

程度にはこの人のことを気に入ってしまった自分がいる。

なんだろう、って考えてたけど……この人は自分を王族としてとか、姫としてとか、そう言うレッテルを貼って扱わないんだ。

ちゃんと一つ一つ自分のことを分かってくれようとしている。父やイリアとは全然違う。レンとも違う。何もかも決めつけようとする貴族社会に於いて、この人って異端だと思う。だから騎士団をこの若さで名実共に率いていられるのだろう。

横で見ているうちにそう気付いてしまった。

部下からの信頼も厚い。貴族達からの権力抗争にも負けないだけの地位もある。誰が騎士団長に選任したかは知らないが、騎士道精神も含め、これ以上の存在はいないのではないかとすら思う。

「サリア姫、今日は遠出をしましょう」

「遠出？城から出るの？」

“ 出て良いの？” っていう意味で尋ねた。

ちよつと前まではどさくさに紛れて一人でよく城下や近隣の村々まで警備という名の下に馬を走らせていた。だがここ最近父王のお小言の多さに半ば諦め掛けていた。

外には自分に出来ることが沢山あった。

外には困っている人が沢山いるからだ。

そりゃあ、『緑の手』の事はばれてはいけませんが、人命より大切なモノって何処にあるのだろうか？

もしも、人を助けてこの力が公になってしまったとしても後悔はしない。

もしも、人を助けられたのにそれを躊躇ってしまった時の方が後悔する。

だからこの力は惜しまず民に与えよう。

それにただ使っているわけではないのだ。ちゃんとばれないように加減して使うことだって覚えたんだ。

それなのに、薄々勘付かれていたのだろう。自分が外でやっている慈善行為を王は嫌がったのだ。

(でも……私なら助けられるのに)

寿命を延ばすなんて行為は越権だと思う。人の生き死にに関して、自分の力でどうにかしようとは思わない。この手で行うべき事は、傷付いた大地に力を与えることと、その大地の傷のせいで害を受けた民達を癒すこと。

自分の力で寿命を延ばすなんて、本来はやってはいけないのだ。本来は……。

『サリア、クロスを看て欲しいの』
いつから？

イリアはなんで歪めた力でクロスを生かすようになったのだろうか…。

いつから愛人のような美しい『髪結い』に美しさを与えているのだろうか？

歪んだ命の力は彼らにどんな結末をもたらすの？

つい俯いているとユーリの手が髪の毛を摘んだ。

「行きますよ？」

いつの間にか用意されていた愛馬の手綱を渡された。

本来、姫と騎士ならお姫様抱っこで一頭の馬上に上がるのだろうがそんなタマじゃないことはこの数日で読まれていたらしい。ユーリとそれぞれ馬に乗った。

用意された馬具が自らの専用の物だったのも少し驚いた。

父王が活発な自分のために作らせた専用の馬具。つまり、馬にいちいち触れて『緑の手』の力を無駄遣いしないように馬に触れずに乗れる、覆う部分の大きい馬具。

彼は自分に触れる時は必ずきれいな白手袋を着用しているし、もしかして全て知っているのではないかと疑いたくなるくらいだ。

婚約数日で濃厚接触されても困るけど、不自然に触れないと他の心配もしてしまう。

「実は男色家？」

「姫、思ってることが声に出ています」

「ちゃんと訊いたんです。アナタに」

「言葉を選んで下さい」

「違うんですか？」

「違いますよ。ちゃんと女性が好きです」

じゃあ、なんで触れてくれないんですか？……とは訊けずに彼の後ろに付いて馬を走らせた。

『烏姫』だから、ですか？とも訊けなかった。嫌われたくないって思ってしまったから。

決定的なことを聞いたら取り戻せない気がして躊躇った。

あんまり前を気にしていなかったら随分と距離を離されてしまった。

この人は、自分のことは全く女扱いしていないのだろう。馬を走らせるスピードはほぼ全力だ。

門を抜けて二人とも無言で馬を走らせた。

普通の貴族の遠乗りとはかけ離れたデートだが、自分はすごく楽しかった。

城を離れて彼の選んだ道は街道を山の方角へ。

都会から少し離れて自然の多い路へ。

決して走りやすい路ではないし、この距離は確かにゆっくり走らせていたら日が暮れる。

彼が自分の馬術の実力も確認せずに駆けていくのはちょっとどうかと思ったが、優れた馬術の先導を追い掛けて登って行くのは結構楽しかった。

空は青いし、空気が、木々が、花々が祝福してくれるようにキラキラしている。

艶やかな色の緑はレンの髪の色みたいで本当に美しい。

そんな自然が大好きで、久々に外に出た自分は外の世界の空気に飢えていたことを知った。

パラパラと降る通り雨も優しく包み込んでくれるようで、つい笑いながら馬を走らせていた。

時々ユーリが振り返ってそれを確認していて少し気恥ずかしくな
ったが構わない。

だって、次はいつここに来られるの？

崖に差し掛かってユーリは馬の速度を緩めた。

「ここら辺で休憩しますか？」

「あ、はい」

と先に馬から降りたユーリがこちらに手を差し伸べた。

「自分で降りられます」

「甘えるのも女の人の仕事だと思いますよ？」

馬を走らせている間は甘やかしてくれなかった癖に……と思って
しまったのは自分らしくない。

そんな心中が恥ずかしくなって、ばれないように祈った。

彼の首元に手を伸ばして身体を抱かれると、全て筒抜けなんじゃ
ないかと思えてくるから。なんか息切れする。

「姫。ここ、どこだか分かりますか？」

「え？」

周りをゆっくりと見渡した。

彼が言っている意味が、少しずつ理解出来た。

この人……………。

「ここは……………」

自分が半年前に『緑の手』の力を使った場所だ。

綻びが多いその力を埋めるために自分は走り回っていた、そのう
ちの一カ所。

そこで何人かの騎士を見た。そのうちの一人が……フラッシュバ
ックするように先導していた騎士の顔を思い出した。

「ユーリ、アナタ……………」

心臓がバクバク言っているのが分かった。

初めてバレた。レンも知らない、父とイリアと自分だけの秘密。

この間のイリアの前での行動は利用価値が高いと思ってイリアか
ら自分を引き離したただけなのかも知れない。

だが彼は続けて言った。

「姫、口外するつもりはありません。ただわかって欲しかったのです」

「何を？」

「私がアナタのことをちゃんと分きたいと言うことを」

「ユーリ、私はただ……この世界が好きなのです」

「はい。それにイリア様のことが大切なんでしょう？」

「はい。イリア姉様以上のモノは私にはありません。私、結婚してもこれは変えません」

首を振って懇願するように言った。

貴族間の形だけの婚姻とはいえ、こんなに不道德なことはないだろう。夫が一番には考えられないと始めから宣言しているのだ。

それでも、があるなら……と。

ユーリが白い手袋をそつと外した。

耳元から頬に掛けて触れるかと思うくらい近くを温もりだけ仄かに残して大きな手が通っていく。

「本当は、直に触りたいんです」

「ユーリ」

「ちゃんと、貴女のこと好きですから」

そう言って照れながら笑う彼に、触れて欲しいと思った。

ただ彼が事実を知っていることでそれが簡単に叶わない事も分かった。

「私……」

「貴女はもうイリア様の側に居てはいけない」

「でもっ！」

「イリア様は貴女に甘えてろくな事をしなかったでしょう？」

『緑の手』というポストはイリアに与えられたもので、自分はまだその力を持っているだけ。だからその力をイリアのために使うことに躊躇いはなかった。

例え不当に使われていても。

でもそれが間違ってるってあの城で言える人間は居なかった。

この人、何もかも踏まえてケン力を売りに行ったんだ。

「その力はグランローズの民のために使いましょう。貴女はここで
そう言った」

「私は……………」

「姫、その為になら私の力を幾らでもお使い下さい」

「ユーリ…………でも私、イリアが大切でっ！」

「はい。分かっています」

躊躇っていると仕方ないなあって顔でユーリが微笑んだ。その直
後、彼は自分の前に跪く。

右手を胸に当てた彼の紡ぐ言葉は神と、この国と、そして自分へ
の誓いの言葉だった。

「私は騎士です。貴女がイリア様に忠誠を誓うように、私は貴女に
誓いましょう。命令を、サリア様」

「ユーリ、私……………そんなの要らないわ」

「私と一緒に、グランローズを支えていきましょう」

「そんな言い方……………ズルイ」

結局のところ彼だっで自分を自由にはしてくれない。

この国に縛り付けていることには間違いない。

それでもイリアの手よりも、父王の手よりも、この人の手を取れ
ばより多くの民を救える。

鳥籠が大きくなっただけなのかもしれない、自分は意図せず
彼の身体を抱きしめていた。

発動した癒しの力が白く二人を包み込み、お互いの境界線を分か
らなくさせた。

それでも構わず抱き合った。費えていくモノがあるこの接触を無
駄にしないように。

その温もりを忘れないために必死にその手を伸ばして想いを重ね
合った。

“グランローズの花が咲かないのは今の『緑の手』が正統後継者ではない為だ。”

貴族議会でそういう発言があつたのは二人の婚約が決まつた直後のことだつた。

自然災害のあつた領地で黒い髪の『緑の手』が救世主のように現れるという噂も相俟つてイリアを審判に掛けようと言う声が世論としても高まりつつあつた。

黒髪の…というのが誰を指すのか、グランローズの人間で分らない者はいない。

この国は金髪の者を初め、色素の薄い色が多い。そんな中の王女だからこそ彼女は『烏姫』と呼ばれたのだ。

無意識でふうーと吐いた長い溜め息に自分で苦笑した。

第一王子という立場の自分からすれば彼女が『緑の手』になつてくれた方が好都合なのに、サリアの心中を案じてしまう。

最近彼女は美しくなつた。

否、顔立ちについて何かが変わったわけではない。

整つたその顔立ちに当てられる様な色香が加わつたとも言つたのだろうか？匂い立つ様な色気にクラクラすることがある。

そんな時は必ず、ユーリが側にいる。

彼女の幸せを考えれば、ユーリの側で健やかに生きて貰うのが一番だ。

例えば彼女が正式に『緑の手』になれば、王家の血を引かないユーリとは絶対に婚姻を結べなくなるから。

「レーン！」

明るい声でこちらにやってくるのは渦中のサリアとユーリだつた。二人は最近よく遠乗りで街に出ることが多いらしい。仲睦まじいと侍女頭が逐一報告していた。

（まさか…とは思つけどね）

こんな噂が立っている時に慈善事業に打ち込む程愚かじゃないだろう。だが同時に彼らは目の前に苦しむ人を見捨てて将来を考える程したたかにはなれないことも知っている。

だからこそ二人が好きなんだ。

一応忠告はしたほうが良いのかもしれない。

「ユーリ、最近議会に出てる？あんまり見掛けないけど」

「申し訳ありません、レイニード様。父からしばらくはサリア様に付いていて良いと言われたので……つい。剣を合わせるのに夢中でした」

色気の無い理由をユーリは口にした。

だが彼らの格好がそれを本当だと裏付ける。

甲冑を外しただけの騎士団の稽古着に汗を滲ませ、サリアもユーリも細かい傷を身体中に刻んでいた。

「一応、こんな妹でも一国の姫なんだけど」

「申し訳ありません」

ユーリはすぐさま主にするように頭を垂れた。サリアが横で違うというように首を振る。

口を挟まないだけ彼を立ててるというところか。

「ユーリ、サリア、君らは外でいつも何をしてるの？変な噂が立ってる」

「えっ！？ええっ！！？」

サリアが声を上げた。ユーリは控えます、と微笑した。

ユーリはもしかしたら知っていたのかもしれないな。

食えない騎士をもう一度見つめる。彼がサリアのことを全て分かっているなんて思いたくなくて言葉を選んだ。

「城から抜け出して何をしてるのは知らないけど、サーリアは立場を考えて。イリア様の立場が悪くなるよ」

彼女が一番嫌がる言い回しを敢えて選んだ。ぱっと面持ちが変わってその表情に影を落とす。やはりあの女はサリアに悪影響だ。

「レンは姉様のところに行ってる？」

「行っていないよ。だって僕はイリア様が嫌いだもん」

「だもん…って」

「あのヒトも外に出た方が良いんだよ。サリアが会いに行けば図に乗るからダメ！」

「図に乗るって…姉様はただ寂しいだけよ？誰にも触れずに生きて行くのは辛いことだわ」

（それはサリアだって同じだ）

彼女が誰にも触れないことくらい、分かっている。双子の自分すら決して触れない。

『緑の手』を持って生まれて来てしまった彼女達はお互いを慰め合って生きて行こうとしていたことも知っている。

（でもそれはダメだ）

あの魔女の思う通りになんてさせない。

大事なサリア。

あれはもう姉様なんかじゃないんだよ。

君を喰らう魔女だ。

鳥籠を開けてあげるから早くお逃げ。ちゃんと魔女の方から手を離すように仕向けてあげるから。

毎日正午過ぎ、騎士団の定例演習を終えるのを見計らって小鳥は大空を泳いだ。

いつもの夕日の時間より少し早かったが、サリアがより空を見上げる可能性のある時間を選んだのだ。

だがこの一か月、扉が開かれる事はなかった。

「クロス、もう良いわ」

呟くと空の小鳥が絡めとられていくようにこちらに降り立つ。

解放してあげられない…。そんなの嘘。

クロスを解放する方法はある。

柔らかい羽根の感触を通り越して握り締めて潰そうとした。白色光、自身の治癒能力が肉と骨を潰したその場から再生させていく。再生が強いのか、破壊が強いのか…潰しければこの生かす手でも命を断てるはずだ。だがそれがサリアの使っていた力と全く異質のものに見えて咄嗟に手を放した。

この手の中に在る力があのキレイなモノと同じには思えなかった。そこまで痛め付けても無抵抗の小鳥に、最後まで締めることは出来なかった。

クロスはもう生きていないことに気付いてしまったから。殺したのは自分だ。じゃあいつから？

サリアがずつと行っていた延命は理を曲げていた。

いつしかクロスは生きる屍になっていたのだ。気付かないうちに殺してしまっていたのだ。

「ふ…つう…つ」

噛み殺すように声を抑えた。この部屋のすぐ隣りには『髪結い』と侍女が控えている。

サリアが人払いをしない限り、自分は大きな声で泣く事も叶わない。

あそこには小さな自由があったんだ。

自分の自由はサリアの犠牲の中にあったんだ。

手放してはいけないその者を、誰が奪った？

そうだ。

自分も、クロスも、あのキレイな手にちゃんと殺して貰おう。

そしたら死ぬ間に生きれるはずだから。キレイに死ねるはずだから。

だから、今は汚れる事でその生を確認したかった。

部屋のベルを鳴らして震える手に力を込める。

扉が開け放たれて、美しい青年が入って来た。

名も知らない、自らの所有の印が刻印された『髪結い』。

今日、私を汚すヒト。

父王が自分を召喚したのは騎士団の演習後の事だった。

毎日イリアの無事を確認するかの如く、南塔からのクロスの飛翔をサザンと見守っている最中だった。

ユーリが騎士の正装を持って駆けて来た。

「ドレスが間に合えば良かったのですが…」

「要らないわ。私、騎士になったんだから」

「私の姫様ですよ」

深い緑の制服にマントを渡されて団員の貴賓室に入った。ユーリが外に控えているので稽古着を急いで脱ぎ捨てて真新しい正騎士の正装に袖を通す。黒く長い髪の毛は動きやすいように簡単にまとめ上げた。

似合う似合わないではなく、釣り合わない。本当は実績も何も無い今の自分が着れる服ではないが、王の御前に立つのにボロボロの稽古着というわけにはいかない。それでもユーリの用意した服は試着を重ねたかのように身体に合っていた。

羽織ったマントからは彼の身体から香る伽羅香と同じ香りがした。ふいに身体を抱き締められた時の事を思い出してしまい顔が赤くなるのが分かった。

そんな時間の余裕も無い事に気付いて首を振る。

本当はまだ勲章の授与式だって先の話。だから今のタイミングで尋問のような場は避けたい。

噂は殆どが真実だから。

でももう逃げられないことも事実。自分が暴動を抑えなければこの国は保たない。

マントを大きく翻して自分に言い聞かせながらユーリの待つ扉の外に出た。

「行きましょー！」

「はい、サリア様」

グランローズは未だに咲かない。

だけど『緑の手』はそんな咲かない花を咲かせる努力よりも一つ一つを助ける事だって出来る。例えばそれがイリアには出来なくとも、自分なら出来る。

それを父王にはわかって欲しかった。

謁見の間の大きな扉を控えていた近衛兵が開け放った。

公・候・伯・子、上級貴族が揃い踏みの中、背筋を伸ばして前へ歩く。

少しでも緊張の糸が緩めばその場に崩れ落ちてしまいそうになるほど気を張っていた。

それでも背中を守るユーリがいる心強さはいつもと違う。

家臣達もいつもの自分と違う様子を読みとって真剣な面持ちでこちらを見つめている。

「サリアで御座います」

跪いて言う王が一瞬息を呑んだ。来て欲しくなかったとも言えないような表情に父の状況を察した。

今、自分……サリア「グランローズはこの歴史在るグランローズの社交界に於いて不穏分子になってしまっている。ここにいて全ての人間がまるで魔女裁判でもするかのような冷たい視線を投げ掛けていた。

そう、『緑の手』の特徴に合わない自分が救世主になどなれないのだ。

自分は落ちこぼれでなければならないのだ。

可哀想な『烏姫』。

パツと父から目を反らして下を向いた。

目を合わせていられなかった。父が自分の娘を売る所を……せめて見たくなかったから。

「サリア」グランローズに北塔での無期限謹慎を命ずる。これは地方領で『緑の手』を語り、民を惑わせた罪によるものだ」

「なっ!？」

無期限という強い言葉に弾かれたように反論の声を挙げようとした。すぐに父に目で拒絶される。中身を探られたくない内容であることはお互い様だった。ユーリが前に出ようとしたがマントの裾を引っ張って押し黙った。

ユーリは自分の手を拾い上げるように掴んで手袋越しに口付けをする。目を閉じることなく真剣な面持ちでこちらを見つめた。まるで大丈夫だ、と言っているような視線に彼を下がらせる手を弱めてしまった。

「サリア様は外での慈善活動にイリア様の名前を出していません」

「ユーリっ！良いから…私は謹慎してきます。それで済むなら容易いことでしょう?。」

納得出来るはずない。それでも聞き分けの良いふりをして頭を垂れた。

この国はどうなってるのか、慈善活動に誰がやったかなんて関係ない。それなのにこんな風に見せしめのように罰せられる。

腐っているのはどこから？

陽の当たらない王宮の奥深く、根腐れしてしまって咲かないグラノーズの花と同じように、この国の法律はもう機能していないのだろう。

民を納得？貴族の言いなりになって破滅の予兆を攪乱させているだけだろう？

本当は全身の力が抜けて動く気力も萎えていた。自力で立ち上がり、下がるうとするのはまだ王族のプライドが残っているせいか、それとも自分を信じている人々のお陰なのか……だが近衛兵達が身体を拘束しようと近寄ってきた。

「待てっ！私がお連れする。サリア様に指一本触れるな」

「ユーリ……」

「陛下、騎士団長である私がお連れします。彼女は王族なのですから丁重に扱われるのは当然の権利です」

ユーリの宣言に父は頷いた。せめてもの親心なのかもしれない。
でも、見ておいて？これは将来、貴方の背中になるのかもしれない
のだから。

本当の小鳥は誰？

囀るように琴の音だけがあの青い南塔から城下に響いていた。
生を与えるはずのその音は美しく、物悲しい。
まるで生きてることをただ呪うかのように響く。

小鳥姫と烏姫（後書き）

世直しできるかこころご期待……………。

髪結いと幼姫

？・髪結いと幼姫

何をしてるのかな…………

父も、レンも、イリアも、ユーリも…………自分すら迷走している。ここで何をしていれば最善なのだろうか？出来ることは何もなくて、それでも自分は生きていなければならない。死という選択肢はなかった。ここで逃げたらイリアはどうなってしまうの？

出来ること、それは待つことだけだった。

壁と、小さな洗面台と、ベッドと鏡。扉の片方は相変わらず鍵が付いている。

始めの3日は放心した。

次の日は泣いた。

今日は諦めがついた。

何も出来ないのだ。

朽ちていくかもしれない。その前に死ぬのかもしれない。

でも自分の力を必要とする事態の方があつてはいけないのかもしれないから。

「どうか…………」

姉様を助けて。レンを…………。父を…………。

そしてユーリがいつまでも健やかでありますように。

今となつては有り得ない結婚になつてしまったのだろうが、彼の次期公爵に思いを馳せて祈った。

無力な自分に出来ることは祈ることだけだったのだ。

「はあ？なんで？嫌だよ」

「エイリ、そう言わずに」

と、この似非笑顔を携えた兄は言った。

そう言わずに……で対処出来ない何かを彼は口にしたのだ。

『髪結いになって欲しい』って。

『髪結い』って職業知ってるか？あれは呼び方は違えど奴隷だ。

攻撃系の魔法一切を封じて家事系の魔法だけ覚え込まされた馬鹿の一つ覚え。自分はそんなものになるために魔道士になったわけではない。

（最も……高尚な目的がある訳じゃないけどね）

正直言つて全てが怠かった。

魔道士にでもならなければ自動的に王国騎士団に就職させられるのは目に見えていた。

何せ自分、エイリ「ルミナスは由緒正しきルミナス公爵家の次男坊として生まれてきてしまったわけだから。ついでにこの長男坊は例に漏れずに騎士団所属。

だが自分はまんまと父親騙して『騎士になる前に魔道学校でちゃんと魔法を習いたい』と魔道学校に入学。そのまま王立魔道研究所の在宅研究員として就職し、屋敷の離れに3年引き籠もりを継続中。

このまま家督争いやら騎士団みたいに血生臭い所から逃げ延びるつもりだった思惑は、兄貴だつて承知の上のこと。

生来の面倒くさがりはちよつとやそつとじゃ治らない。

第一、生まれてこの方、『仕える』と言つことをしたことないの
で良家のお嬢様付きの『髪結い』なんかになったあかつきには一日でクビになる自信がある。

「……………なんで？」

「私の婚約者」

「ユーリの？烏姫？」

「幽閉されました」

アハハ、と軽い笑いと共に兄貴はとんでもないことを言った。

彼女は腐っても王族。しかも良いトコも悪いトコも有名な姫で、彼女を幽閉するには民の反発だって覚悟しなければならないハズだ。だから自分が知らないのだろう。内密に幽閉されて、そのうち病死とかが発表されるのがオチか。

『烏姫』という名前から悪いイメージを想像しがちだが、彼女は平民から絶大な支持を得ている。一度だけ遠くから見たことがあるが、それは美しい黒を称えた……美しい姫だった。（男装はしていたけどね）

『緑の手』である『小鳥姫』の方も見たことがある。精気のないお人形のような美しさ。正直言って、感じる印象は『死』だ。民の嫌悪感が絶えないのもそのせいだろう。

自由奔放だし、とんでもないウワサも多いが、民を差別しない烏姫の方が人気が出るのも頷けた。

でも……姫を幽閉するって……。

「多分近いうちにサリア様を核にして革命を起こそうとしていた輩がいるみたいです。それを潰すために彼女は呈の良い厄介払いをされました」

「ふーん。でも姫なんだから『髪結い』の一人や二人お抱えのが居るだろう？」

「居ません。彼女はそういうところが烏姫なんです」

「あーあ」

奴隷制に近いような髪結いをあの平等主義の姫は欲しがらないだろう。ウワサを全て信じているわけではないが、ウワサだけで想像すればとんでもなく無鉄砲でやんちゃな姫だ。そもそも髪を結うなんていう淑やかなお姫様らしいことを望むような女じゃない。

「という訳で……魔道士としての力量、貴族として地位、貴方以上に彼女の『髪結い』に相応しい人物はいないと思いました」

「おいおい。どういう訳だよ」

「髪結いとしての仕事を全うして来いなんて言いません。様子を見てきてください。どうせサリア様は髪を結えなんて言いません」

「それって女としてどうなんだ？」

「自分で出来るんですよ。あのコ、ちゃんと自分でやるんです」

『あのコ』と言った兄貴の語る『サリア』に興味が出た。姫なのに随分と近い言い方。この兄の性分で、こんなにまで気に掛ける何かがあるのだとすれば興味が出てきた。

「『髪結い』………の紋章は後で解いてくれるのか？」

「ええ。役目が終わればちゃんと他の魔法も使えるようにさせます」
「じゃあまあ」

「ありがとう。サリア様によろしく」

自分と似た顔の兄貴は目を細めて慈しむように顔を綻ばせた。
顔は似ていても、自分はこんな風には笑わない。

触れた身体の温もりは今でも鮮やかなものだった。

優しい手だったから。

きつと騎士団に所属したからには誰かを傷付けた事だってあるはずだ。

それでも守るモノのある、守る事のできる温かい手。

いつか自分ではない女性を守って行くのだろう。

床に座り込んだまま外に続く扉に語りかける。

「ありがとう」

掠れた声で呟いた。小さい声だったが部屋は物があまりないおかげですぐに反響した。

心に染み入るように、その礼は別れの言葉となる。

ここなら彼が他の女性を抱く事を見なくて済む。逆に一生遂げる事の無い両思いに浸っていられる分幸せなのかもしれない。

（でもシワシワになっても同じように恋してたら気色悪いか？）

尼達はどうやって神様と婚姻するのかしら？どうやったら俗世を忘れて信心深くなれるのかしら？

その域に達する事がこの苦しみから逃れる唯一の手段に見えた。
無力な自分を確認しながら生きて行くの。

父が自分を忘れていっても、イリアが殺されても、ユーリが他の女を選んでも、それを知る手段すらなく生きて行くの。

「寒い…」

地面の冷たさを初めて感じた。寒くて、寂しい。

ここには『死』しかない。生を与える『緑の手』の力を全く必要としない。

私はここで初めて烏姫でもない、騎士でもない、イリアの妹でもない…ただのサリアになれたのだ。

でもそれは纏う物を無くす事と同意儀だと気付いた。

心細くて、その不安が身体の体温を奪っていく。

いつまで？いつまでも？

カタカタと物音がして反射的に身体を動かした。どうしてもか、確信したように口をついた。

「ユーリ？」

「うわっ！この部屋湿気っぽいし寒い！サイテー」

ユーリの金髪とは違う銀髪。でも姿形はユーリ。纏う気配もユーリのものと同じ。

でも右頬から肩に掛けて記された紋章に息を呑んだ。黒い法衣だと思われる外套に縋るように手を伸ばす。

「ユーリ、それは？」

「俺はユーリじゃない。アンタがサリア？」

「え？ええ」

混乱する。顔に髪結いの紋章を持った青年の顔は奇跡に近い程ユーリに似ているのだ。

「あなたは？」

「『髪結い』」

「誰？」

「だから『髪結い』！奴隷に名前是要らないだろ？」

そう言つて小馬鹿にしたようにフツと笑つた。

前言撤回！ユーリとは似ても似つきません！！

「じゃあ歸つて良いわ。私『緑の手』じゃないから『髪結い』なんて要らない。ついでにここから出られないから髪をいちいち結い上げる必要もないし、寝て暮らすだけだから清潔にする必要もないし、あなたにお給金支払つてあげられないもの」

「あつ、そういう事を気にしちゃう？」

「世の中の仕組みくらい分かります！農民のように何かを作り上げることや、遊牧民のように育てる民は尊敬に値します。それらを繋ぐ商人は大切な流通の糧です。王族は何も生さない分、平成の世は守らねばなりません。何も出来なくなつた王族なんて家畜以下のペツト同然ですよ。あなた、ペツトの奴隷になつて楽しいの？」

「楽しくなさそうだから一度は断つただけだね。アンタに会つたら断然楽しそうに思えたよ。飽きさせない跳ねっ返りっぷりだね」

とユーリと同じ顔を豪快に歪ませて笑い飛ばした。

不思議と表情は全然違えど似ている気がする。

（でも…少し若い？）

「弟さん？」

「さあ？奴隷の正体なんてどうでも良いじゃん」

「奴隷に易々納まるように見えない」

「そりゃどーも」

「目的は？」

「『烏姫見学弾丸ツアー』片道切符で来たカンジ？人生行き当たりばつたりがモットーです」

そんなモットーは認めません。

ユーリとはまるで違う性格。でもふとした仕草が、気配が、似ている。多分それは育ちのせいだ。そこから推測される理由はやっぱ彼の公爵家の人間だと言うこと。

「誤魔化すならルミーって呼ぶわよ」

「呼んで？全然返事しないし。俺は勝手にするからさ」

と楽しそうに微笑んだ。うつわー、ボコボコに殴りたい。ここに
至るまでに体力を消耗していなければ絶対殺ったのに。

「ユーリ、元気？」

「走り回ってるから元気」

「そっかぁ」

なら良い。

取り敢えずはその答えで満服だ。

「髪結いさん」

「ルミーじゃなかったの？」

「アンタ魔道士？」

「アンタホントに姫？言葉遣い汚いね」

「ここで姫様演じたって仕方ないでしょ！答えなさいよ！」

「だから『髪結い』。この紋章はそれ以外を成さない証でしょ？」

右頬の刻印を指して笑う『髪結い』に手招きした。

「アンタここから出られるの？」

「当然。物の持ち込み持ち出し禁止だけど伝言くらいは承ろうか？」

「要らないわ。なんでルミナス公爵家の人間が『髪結い』なんて……」

「ユーリが初めて頼んで来たから」

「ユーリ、が？」

「おおっ♪ユーリの話ならそんなに可愛い表情するんだあ？カツワ

イーねえー」

からかうように目線を合わせる彼は不自然にそのまま動きを止めた。しばらく自分の顔を見つめると神妙な面持ちでこう呟く。

「オマエ、臭い」

「は？」

「臭いっ！肥だめみたいな臭いがするっ！悪臭！公害！人間の敵！
っ！か犬の嗅覚なら気絶もん！」

レディに向かってそこまで言う？

ここに入って約二週間。浴室は存在していないし、水瓶を持って
きてくれる侍女もないのだから髪だって身体だって洗えない。仕

方ないじゃないか。

「自分で出来ないなら髪の毛なんて切れば？」

「だめ。これはイリア姉様とお揃いの長さだもん」

「じゃあ髪結いは必要だ」

鼻は摘んだままだった。が彼は魔法で簡単に水瓶を取り出した。：

自分の頭上に…。

バシャッ！

水瓶にいつぱいの（冷）水が身体中に浴びせられた。更にパチンと指を鳴らすと全身が泡立てられて、顔も身体も頭も、だ。

（んっ…窒息する…）

攻撃魔法は封じても彼らはいつでも自分達を殺せるんじゃないのか？ここから出れる事があれば絶対に協議に掛けてやる！

今度は火傷しないまでも少し熱いくらいのお湯が何度も降って来た。

こんなにしたら床がダメになる…。

と気付くと髪の毛は乾かされていていつものように一つに結ばれていた。

ベッドも、床も、何一つ水害にあった形跡は無い。更にはあんなに寒かった室内が暖炉を入れたようにポカポカしていた。

「ここは湿気っぽいから火の護符を置いてくよ」

「あ…ありがとう」

「変な姫さん。王族の割りに簡単にお礼を言うんだな」

「変？」

「変だね」

「貴方もきつと、変よ」

彼は凄腕の魔道士に違いない。髪結いに納まるのは勿体ない。そう思っただけ彼の頬の紋章に触れようとした。

「いやん！やめてん」

「変な声出さないでよ」

「取り敢えずまた来るから、誘うのはその時にしてくれな〜い？」

「誘ってない！」

「俺に触ると高いよ。お給金払えないんでしょ？」

からかうように笑って彼は部屋を出て行った。背中を見送って大きく深呼吸をする。

ああ、この部屋が生きてる部屋になった。久々にいっぱい喋って、頭動かした。命が吹き込まれるような良い風を持った人だったから。（あったかい…）

そのままベッドに横たわると何日ぶりかぐっすりと眠れた。

夢の中ではイリアとレンとユーリとクロスにサザン………それに何故か彼の『髪結い』と、みんなに囲まれて緑溢れる森の中で笑ってた。

今日も咲かない。

『緑の間』は南塔の地下から本堂の地下に入ると存在する。王の間からと南塔からでしか辿り着けないその場所は、いつの日からか父王すら近寄らなくなっていた。

自分の力ではこの大輪の薔薇が咲かないことを知っているからだ。そして父が自分には期待していないことも知っている。

本当はサリアにも試させたいのだろう。でもそれを一度でも行えばサリアの存在に気付いた貴族達が今の王家を潰しに掛かることだつて考えられる。だから父の決断でサリアが新しい『緑の手』にすげ替わる心配は無かった。

それでも父は自分には期待していないことは事実。代わりに早く次の『緑の手』が生まれてくるのを待ち望んでいる。だから、レイニードとの縁談は勿論のこと、自分が愛人を措くことも善しとする。父の気持ちも分からなくはない。日に日に萎れてきているグラントリーズの蕾を見下ろした。こんなモノがなければ自分達は何にも縛られなくて済むのに。

自らの手がグランローズに捧げる白い光は、クロスを生かしていたあの光と違うように見えた。

自分の力はサリアのそれと同質のものに見えなかったのだ。

毎日それを確認するように『髪結い』を抱いて、治癒能力を発動させた。だが未だに分かったことは一つもなかった。

ただ、自分の業の深さ。それだけが積もり積もっていくようで……。

パタパタと地下への階段を下ってくる音が聞こえた。

ハツとして『緑の間』の入り口を見つめる。

足音の人間は『緑の手』とグランローズ王しか入れないその場所には流石に立ち入ることは出来ず、扉越しに呼びかけるに留まった。

「イリア様！ 申し上げます…… クロス様が……」

「え？」

「クロス様の容態が急変致しましたっ！」

部屋付きの侍女の震えるような声で急を要することを知った。彼女はクロスが死ねば鞭で打たれてしまうことを知っているのだろう。だが自分はそんな彼女の事情も関係なしに鳥籠の元へ一目散に走っていた。

城の中とは言え、走るのなんて何年ぶりのことか。

命に限りがあることも、小鳥の命が小さいことも知識としては知っている。

でもクロスはずっとサリアが守ってきた命。自分が苦楽を打ち明けてきた同士。

クロスがいなくなってしまうたら本当に『小鳥姫』が死んでしまふ。

息切れしながらも南塔の自分の部屋を開け放ち、籠からクロスを取り出した。

（お願い……、私の命をあげるからっ！）

この手から発せられた白い光はクロスを包み込み、治癒させる。だが……その反応は微弱なものだった。

(あ……………ああ……………そうだったんだ)

この手は確かに『緑の手』かもしれない。でも脆弱過ぎるだけだ。これではグランローズを咲かせることは叶わない。それでもグランローズを保たせることは出来る。その程度。

少しだけ息を吹き返したクロスをそのまま連れて自分はもう一度走った。クロスをちゃんと助けることが出来る場所へ。

いつの間にか毎日来るようになった『髪結い』を毎日楽しみにしている自分が居る。

ここにいて楽しみなんて他にないから仕方ないのだろう。彼と話すことが楽しかった。

でも未だにこの乱暴な洗濯には慣れない。洗い濯ぎ脱水。これは洗髪や入浴なんかじゃなくて絶対に『洗濯』って言うんだ！

苦しみから解放されて、血行が良くなり温まった身体を確認した。それでも脱いだり不必要に触ったりしない分、この方法が自分には合っている。

「髪結いさん、なんかお土産話してよ」

「は？なんで俺が？」

「ここツマラナイから。本でも在れば読書でもするのに」

「勉強家だな。俺は勉強嫌いだから話せる事もないよ」

「魔法！魔法の話してよ」

「はあ？」

「私魔法使えないから原理とか全然知らないの。なんか掻い摘んで教えて！出来るようになるかもしれないし」

「アンタ囚人の自覚在る？」

「無い！悪いコトしてないもん」

と、毎日来て貰うようになったら悩んだことにも決着付けちゃいました。独りでウジウジしてるとろくな事考えないもんね。良い

ことだ。

最近朝のうちに筋トレと剣の素振りの練習をして、昼には賛美歌を唄って神に感謝して、午後になると彼が来る。規則正しい鍛錬をすることでいつでも社会復帰出来るように控えてます、と。

面倒くさそうに彼は呟いた。

「魔法は精霊の力を借りてやるんだよ。魔法が使えないのは精霊に嫌われているか、『緑の手』みたいに精霊そのものに近すぎるのか」

「へえ。それで、か」

「自分が魔法を使えない理由が分かったか？」

「んー、そうじゃなくて。アナタは精霊に好かれてるからそんな風に腕が良いのねえ」

「はあ？オマエ……………それって」

彼が顔色を変えた。実際、彼が魔法を使えば周りの精霊達は喜んで彼に力を貸しているのが分かるから。それを伝えようとしたその時、外界に繋がる扉が開いた。

思いもしなかった来訪に息を呑んだ。いつぶりか、イリアの姿。

いつもと逆だ。はあはあ、と息を上げさせた彼女の姿を見るのは初めてのことだった。

「サリア……………っ！クロスがつ！」

泣きそうな声で言った。乱れた着衣を直すこともせず彼女は両手の上に乗った淡い色の小鳥を差し出した。羽根に色艶がないから見間違えかと思ったが、その今にも消えそうな枯れた声で鳴くのはクロスだ。

『髪結い』を咄嗟に見つめるとすぐに承知して部屋の外に出てくれた。

泣きじゃくるイリアの手からそっとクロスをすくい上げた。もう冷たくなりかけているクロスはそれでも姉様の支えなのだ。

(もう少し……………頑張って生きよう)

姉様が一人で立てるようになるまで、もう少し側にいてあげて。白色光が小鳥を包み込み、すぐに元気なクロスが帰ってきた。自

分がイリアから目を背けてしまった分の苦しみをクロスは背負い込んでしまったのかもしれないね。弱り方が尋常じゃないから。

「姉様、クロスは大丈夫」

「サリア……でもっ、もう私は………」

「姉様も、大丈夫」

それはただ言い聞かせてるだけ、思い込ませているだけだって……もうお互いに知っていた。それでもその言葉が支えになればいい。

イリアはそれを聞いて唇をキュツと結んだ。

「サリア、アナタをここから出してあげる」

「え？」

「但し、アナタは全てを棄てて」

「姉様？」

「私、気付いてしまったの。私の力はこの国を守るには小さすぎる。でもサリアの力ではこの国を守れても、反発は大きすぎる」

「姉様………待って！言ってる意味が………」

「私はグランローズを薔のまま枯らさないようにする。なるべく早く次の『緑の手』を産むようにする。だからサリア、アナタにお願い」

イリアがそつと手を握った。

その手はいつものイリアに想像出来ないくらい熱を持っていた。

「アナタは、外の世界を守って！」

「城を………棄てろと？」

「惨いことを言ってるのは分かってる。でもサリアはこのまま幽閉されていてはいけない。アナタがここに居ても私が良いように使って終わりになってしまう」

「私はそれでも良いのよ」

「サリア、命令よ。外の世界を正しい秩序に導きなさい。いつか必ずグランローズの花を咲かせるまで、この世界と一緒に守りましょう」

外に。思わぬ選択肢に声が出なかった。

だが、後ろにいつの間にか戻ってきていた『髪結い』が声を掛けた。

「俺が連れだしてやるよ」

「髪結いさん、今冗談聞いている場合じゃ……………」

「良いから、来い。迷っている暇はないぞ。その『緑の手』が人払いしてくれたお陰で警備が手薄だから今ならいける」

「でも……………っ！私が脱走したことが知れたら……………」

「知れなきゃ良いんだろ？」

パチンと彼は指を鳴らした。

火の護符と言っていたお札から強い熱と炎が吹き出す。

「イリア様もお逃げなさい」

「アナタ……………『髪結い』なのに攻撃魔法使えるの？」

「誰も攻撃するつもりがないので攻撃魔法じゃない。サリア姫はこの火事で死にます。アナタも火に撒かれないうちにお達者で」

彼は自分を先導しながら言った。迷ってる暇は本当に無い。

拳を握りしめてそのまま彼の背中を追って走った。そう、この先

……………外の世界には自分の求めていた解放が待っている。

それが父との、兄との、姉との……………ユーリとの決別だとしても。

（やりすぎたか？）

燃えさかる城の一幕を振り返って一抹の不安を覚える。これは完全に犯罪者のやることだ。他の犠牲者が出ないことだけをグランロイズの神に祈る。

城に放火、姫を誑かして逃亡。

打ち首覚悟の犯罪内容だがそんな覚悟は全く出来ていない。

ただ、この姫を面白いと思ったんだ。

動揺するでもなく、泣くわけでも、青ざめるわけでもなく、ただ自分の生まれ育った場所を目に焼き付けているこの少女に興味を持ったのだ。

サリアは暫くすると口笛を大空に向かって吹いた。風と共に大きな鷹が彼女の上に舞い降りてくる。

（ああ……どこが烏だ……？）

（まるで女神とそれを守る空からの使者のような……）
遅れて彼女の肩に留まった小鳥にサリアは目を見開いた。

先ほどまでイリアが連れていた萌葱色した小鳥だ。

「クロス………なんで？」

サリアの手がクロスと呼んだ小鳥の足を掴む。そおつと覗き込むように見つめて、はじめて涙を零した。

「姉様………姉様………」

小鳥の足には指輪が填っていた。それは魔道書などで見覚えのあるデザイン。グランローズの王家の………いや、代々の『緑の手』の指に填っているリング。薔薇を象ったその指輪は唯一無二の国宝だった。

涙を抑えられない彼女に代わって、そつと自分の手でその指輪を抜き取る。ぶっきらぼうに彼女に向かって差し出した。

「ほら！」

「はい」

サリアの開いた両の手に収まるとそのリングに填った宝石が淡く光り輝いた。自分が触れた時は何も反応がなかったのが、まるでサリアが主だとも言つように。

（面白いヤツ）

サリアは一つに結った黒い髪を靡かせて城を背にした。

その背中を守るように、二羽の鳥は頭上をいつまでも旋回していた。

それは伝説の序曲のような旅立ちの図にすら見えて気分を高揚させた。

旅立ち他突然すぎて、身支度も心の準備も出来ずにここまで来てしまった。

自分が死んでいないことがバレればイリアの立場も悪くなる。荷担したこの『髪結い』なんかは処刑されてもモンクは言えない。

ただ抱えきれないほどの期待と、サザンとクロスを連れて……この『髪結い』と共に行ける所まで逃げてみせよう。

街を幾つ素通りしただろうか、途中で馬を買ってから一度も休んでいない。

魔道士にしては随分と身のこなしが軽いその『髪結い』はユーリと同じように、全く自分のことを気遣わずに馬を走らせた。途中で一度馬に飼い葉と水を与えたきり、停まる素振りを見せない。

当然それが正解だ。城が放火されたことが国境警備に伝われば間違いなく警備が強化される。身分証も持っていない自分が国境を越えるには検疫強化される前に抜けてしまうこと以外無いのだ。

馬術は得意な自信があつたが彼の後ろには付いていくことが精一杯だった。騎士団の馬術訓練にも参加させて貰ったがこんなに上手に馬を扱っていた人を知らない。ユーリよりももしかして……。

なんで魔道士に？ そう思った瞬間に彼のことを名前すら知らないことに気付いた。多分ルミナス公爵家の人間。多分ユーリから頼まれた。多分味方。それは全部憶測。

（今更だけど敵だったらどうしよう……）

国家転落を目指すテロリストとかで、ユーリを語って自分を信用させた……とか？

行き過ぎた想像にプツと吹きだして、それからしばらく馬上で笑い続けた。いつの間にか速度を緩めた『髪結い』が白い目をこちらに向けている。

「疲れた？ 頭イっちゃった？」

「失礼な！」

「それなら良いけど。まあハコイリの姫さんにしてはガンバレマシタネ。この道で振り切るつもりだったのに良く付いてきた」

「ええっ!？」

「ウソウソ」

という魔道士の意地悪な笑いに思わずサザンに嘴で攻撃させようかと考えてしまった。

サザンの鋭い目が自分の考えに呼応するように光る。

（イヤイヤ、まだ味方だから。次は殺る。今回だけは笑えない冗談として流しましょう）

腑に落ちないけどサザンと共にその殺戮衝動を呑み込んだ。

「グランローズ王国を出たよ」

「え？」

「さっきの森の前までがグランローズ。ここは自由都市マグイラの手前」

今まで国境を越えたことは無かったのでここはきつと初めて訪れた。必死に世界地理を思い出し、来た道を推測した。グランローズの城下から恐らく南東に一直線。貿易自由都市マグイラは大きな港を保有する商業都市国家だった。

どこの国にも属さない平民が平民による政治を行う民主主義の街。昔はグランローズの一部だったらしいが百年くらい前に独立宣言して都市国家になった。

今はあんまり治安が良くないはずだ。統治体制が上手く働いておらず、民がどれだけいるのか、どんなのがいるのか、誰も把握出来ていないために犯罪者の温床になっている。

「髪結いさん……もしかして……ここに住む？」

「ああ。しばらく身を隠すにはもってこいだ」

「でもここ……物価高いんでしょ？市民権ボツタクリ級だって聞いたことあるけど」

「何？市民権得たいの？無くても住めるし、オマエ身分明かしたら

強制送還されるだろ？年の割に動じないけどやっぱり世間知らずのお姫さんなんだなあ」

呆れたような口調の『髪結い』にハツとした。嫌がってる場合でも身分でもないのだ。

「いや、全然オツケー！うわあい、マグイラあ」

「わっざとらしい」

「あの……私はここで目立つ？」

色素の薄い人間の多いグランローズではこの黒い髪の毛は特異だった。

「いや？マグイラは毛色の変わったのが沢山居るし、他人をいちいち気にしない。オマエには向いてるよ」

「私に向いてる？」

「ここは自由を探す街だ。海から色んな国にも行ける。その小高い丘からはグランローズの城も望める。ほとぼりが冷めるまではここで一緒に暮らそう」

「一緒に？ねえ、アナタまで逃げることもなかったよね？」

「イヤイヤ、放火したの俺だからね」

「でも私と一緒に逃げる必要もなかったよね？」

「脱獄幫助のお礼ぐらいは貰わないと、と思いまして。オマエが稼いで何か返してくれるまでは一緒に居ることにしたんだよ」

「うえええっ！恩の押し売りいい」

「人聞き悪いヤツ。オマエ顔中に『ここから出して！』って書いてあったし」

「うーん……それは否定出来ない」

ゆっくりと馬を歩かせてマグイラの門を潜る。関所は在って無いも同然に通れた。

彼の言ったように黒い髪の毛の人間は確かに他にも存在していた。それどころか赤い髪の毛、金髪、茶髪、スキンヘッド、グランローズの緑色の髪を持った人間の方が悪目立ちしそうだ。

そんな中でもこの『髪結い』が必要以上に目立っていることに気

付いた。

行き過ぎるたびに街行く人々がギョツとした目線で振り返る。

「もしかしてこの街……」

奴隷身分に近い『髪結い』という職業はこの都市ではまずいのかもしれない。さつきから市場らしき場所で人の売り買いをしているのを見かける。実演販売よろしく焼き印のようなものを身体に直に押されている者もいた。『髪結い』の印だって焼き印で押した方が消えないし楽だって聞いたことがある。王家に仕えるような『髪結い』ならちゃんとした儀式を行って印を描かれるが、こんな場所ですellingている『髪結い』はテキトーにポンポン焼き印を押していった量産タイプなのだろう。

こんな風にちゃんと肌に魔法墨で描かれたその印もさることながら、鎖にも繋がれずに自由に馬に乗っているのは極稀な『髪結い』というわけだ。

「あの、髪結いさあん、少しお話があるんですけどお」

「その宿屋で部屋取ったらで良いか？」

「ああ！良い良い！そりあ名案！」

これ以上町中で注目を集めたくない。彼の指した場所は安宿に見えたが構わず了承した。彼はすぐに三階の角部屋を押さえてくれた。馬を厩へ預けると部屋へ移動した。

宿内に入り、普通に歩くだけできしむ階段と廊下に息を呑んだ。

こんなトコに泊まるのは初めてで、しかも……。

「あなたと同室？」

「贅沢言っな！」

「ごっこ、ごめんなさい……」

旅の路銀も持っていない自分には文句を言う権利は無かった。

でも同室の方が意外と良いのかも。

立て付け悪そうな扉、すきま風吹き込む窓、抜けそうな床、低い天井、薄い壁。一人で寝るには少し不安が勝ってしまう。こういう所が『お姫さん』ってまた言われてしまいそうだが、これは『女』

としての心配だ。決して甘えではない！……………多分。

窓を開けてクロスとサザンの様子を確認する。

「髪結いさん、この大きい鷹はサザン。私の烏姫って……………」

「知ってる。そいつ飼ってるから付いた名前だろ？」

「で、こつち……………この文鳥はクロス。イリア様が飼っていた小鳥よ」

「だから小鳥姫なんだろ？」

「うん。私達に付いて来ちゃったけど良かったのかなあ？」

「オマエがいつか自分で返しに行けば良いんだよ」

そう言っただけ銀髪の髪結いは窓枠に手を付けてその手でサザンとクロスに餌を与えた。いつの間にか用意していた干し肉をサザンに与え、クロスには麦を啄ませる。自分のことばかりで二羽の事など頭になかった事に気付かせられた。

「抜け目ありませんね？」

「どこかの世間ズレしてないお姫さんと一緒にして欲しくくないですね」

「気が回りませんで……………」

「当たり前だよな。オマエ幾つ？」

「もうすぐ15歳になるよ」

「世界を一人で背負って立ってるような顔をするにはまだ修行不足だろ？もう少し子供の顔してたってここでは誰も怒らない」

驚いた。そんな風に考えたことがなかった。

王族は……………ていつも十字架を背負っていたせいかもしれない。

（姫じゃなく、王族じゃなく、牢屋にも居ないただのサリアは……………

…ただの子供だったんだね）

「話って何？自己紹介？」

「まずアナタの本当の名前を教えてください」

「『髪結いさん』で呼び慣れたんじゃないの？」

「いちいち嫌そうな顔してるじゃないですか！第一そう呼ぶと市中では目立ちすぎます」

「人の顔色読むのも10年早い！オマエはもつとワガママになれ！」
また怒られた。でもこういう怒り方する人はあんまり周りにいなかったな。

自由奔放って言われ続けていたけど、腐っても姫の枠は出られなかったって事だ。

「俺は、エイリ。エイリって呼べ。オマエはどうするかな？」

「サリアって呼んでください。『お姫さん』じゃ痒いから」

「ダメだろ？オマエ指名手配されてる自覚ある？」

「え？……じゃあエイリはその名前偽名？」

「いや本名」

「じゃあ、私だって本名で良いでしょ？この街ならあんまり気にしないだろうし」

「サリって呼ぶ。あだ名なら良いだろ？」

「あだ名……うん！」

あだ名なんて城では絶対に使わない。だから少しくすぐったくて、でもその乱暴な響きが温かく感じた。

エイリは頷いたのを確認するとサザンの頭を撫でて窓枠から離れる。

いや、……本題は名前じゃない。

「ねえ！『髪結い』の紋章消さない？」

「なんで？俺、オマエの『髪結い』だし」

「ここじゃ目立っちゃうし」

「じゃあ奴隷らしく鎖で繋ぐ？」

「繋がないし！目立たないようにしなきゃ、なんでしょ？」

「紋章消すには腕の良い魔道士が必要なん……だ……」

言いかけていたエイリの喉へおもむろに手を当てた。青白い治癒の光がその紋章の効果を消していく。やったことはなかったが制限を掛けるこの魔法は、強い呪いのようなものだから消せると思っていた。

エイリの喉がゴクリと鳴ったのが伝わってきた。

（あ……私が『緑の手』だって言っただけでなかった）

でもお陰で申告する必要はなくなったのかもしれない。

『緑の手』だから触らないで下さいなんて……彼のような人に言いたくない。

ここでは、普通に触る時は触ればいい。普通に生きていけばいい。彼が自分を利用しようとしたとしても、それで良いじゃないか。治療能力を隠して今までのように生きていくのはもう嫌だった。

「あの……」

「サリ」

完全に紋章が消えた瞬間にエイリが自分の手を掴み取った。

（あつ……力が暴走するっ！）

無駄に力を発動させてしまうと思って強く目を瞑った。

だが……。

「あれ？何も……起こらない？」

「俺がちゃんと魔法が使えるなら、治療能力が発動しないようにも出来るよ。紋章、消してくれてありがとう」

この人、城に付けた火といい、洗髪する時の魔法といい……更には『緑の手』に普通に触れることが出来るなんてどんな天才？その魔法がちゃんとした研究の末に世に出されていたらイリアや自分はどれだけ暮らしやすかったのだろうか？

「俺も確認したいことがある」

「え？」

「魔法、遣えないって？」

「うん。でも歴代の『緑の手』は遣えないんでしょ？」

「精霊に近いからな」

エイリがすぐ側に近寄ってきて髪の毛を一房掴んだ。まるで研究対象の試料でも眺めるような仕草。眼球の色をチェックしてふうーん、と呟いた。

「何？」

「『緑の手』は木々の色を保有する……だな」

「どうせ私の髪の毛も眼も黒いわよっ！」

「綺麗な色してるのに嫌いなのか？」

「えっ??」

そんな風に初めから言う人はあまりいない。異質とかそう言う先入観みたいなの全て吹っ飛ばした感覚。この人の常識は好きだ。

「オマエこの前、精霊が喜んでるって……」

「ん? ああ……魔法遣ってる時にあなたの周りの精霊達は喜んでるよ。好かれてるのね」

「精霊が見えてるのか？」

「うん。見える。普通の人は見えないんだよね？」

自分の回答を聞いてエイリは笑った。

その笑みは笑顔と呼ばれるようなモノや微笑みと呼ばれるような穏やかなモノではない。まるで悪魔の嘲笑、とでも言いますか。

「あ……あの?」

「良い研究対象みーつけ！」

「は？」

「『お礼』は被験者になつてくれれば良いよ! 『緑の手』を研究出来るなんて魔道士冥利に尽きるし」

「ええっ!？」

仰け反って首を横に振ると有無を言わず髪の毛を引っ張った。泣きそうになりながら彼を見上げると更なる恩の押し売りがやってくる。

「ほら、今日も頭洗ってやるよ」

「え? ええっ!?! いい!」

「だってこういう宿は共同浴場だぞ? オマエ入れるの?」

「きよっ………混浴?」

「こんなボ口宿はあんまり女性が泊まらないから、女性用ってのが無いんじゃないか?」

「よよよ………よろしく願います」

今日も苦しい洗濯のお時間がやって参りました。息を止めて顔を

手で覆った。

精霊が見える、と言った少女は格好の研究対象だった。

2、3日で安宿を出ると、適當下町に家を借りた。路銀は結構持ってきていたが逃亡生活はどれくらいになるか分からない。腰を据えて暮らす覚悟は必要だと考えていた。

自分達が出来る飯の種、なんてのも限られていた。自分とはもちろん、サリアは箱入り娘どころか、本物の姫だ。となれば自分の本職、魔道士であることをフル活用していくことが生きる道だ。

こういう下町には医者が少ない。忙しくはなるが、ここではその道を選ぶのが一番の方法だと思った。その傍らでサリアの身体を研究させて貰えれば自分は文句ない。魔道士としての研究魂は今まさに燃え上がっているのだから。

更に一緒に暮らすうちに分かったことは、彼女は精霊が見えるだけではなくある程度の意志疎通が出来ているということ。

「雨が降るよ」

彼女が言えば小一時間後には雨雲がやってくる。

「洗濯物はよそう。今日は風が強くなる」

そう言っただけのを止めた日に、他の家の洗濯物はいつぱい飛ばされていた。天気を読むのが上手いって言うレベルではない。

巫女、と呼ばれる者がいる地方がある。その者は天気を読み、天気を呼べる。試してはいないがサリアはその域だ。

「サリ、こっちへ来い」

「何？」

「俺の周りの精霊は何て言ってる？」

「え〜？」

サリアは困った風に自分を一瞥した。しばらく自分を………というよりは自分の周囲の何もない空間をじっと見つめていた。

それは他人から見れば奇妙なモノだ。彼女が自ずと『見える』事実を隠したのも処世術なのだろう。

「炎の精霊が……弱冠多いかな？でもバランス良く好かれてるよ。言ってることはよく分らないけどね」

精霊と人の言語とは違う、ということか。

少し精霊文字とか、魔術言語とか勉強させた方が良いのかもしれない。まあ何もない方向に向かって精霊文字で何かを喋っていたら頭がおかしくなったと思ってしまいが。苦笑しながら彼女の髪の毛をおもむろに一本抜いた。

「痛っ！何するのよっ！」

「研究。毛髪の成分から人間と『緑の手』の違いを解析する」

「絶滅危惧種じゃないんだから……『緑の手』にも人権下さい」と泣き言を口にしたサリの頭をヨシヨシと撫でた。

でも『緑の手』は絶滅危惧種だと思っし、人間よりも精霊に近い気がする。しかも多分サリアは今の『緑の手』の持ち主よりもずっとそちら寄りなのだ。

その証拠にこの髪の毛……。

透かすように髪の毛をランプに翳す。怪訝そうにサリアも一緒に覗いた。

「そんなモノ見たって、せいぜい痛んでるか痛んでないかぐらいしか分からないでしょ？」

「魔道士には魔道士なりの遣り方があるんだ。サリは向こうに行つてなさい」

「はあい」

そう言いながらも全然側から離れようとしないう少女に気付いた。ああ、寂しいのか。そう思って少しからかってやることにした。

「サリ、おいで？」

「なに？」

パツと明るい顔でこちらを見た。カワイイことだ。

「研究に遣いたいから色んな所の毛を頂戴っ」

自分の言っている意味がすぐに理解出来なかったらしくしばらく目を白黒させていた。少して意味を呑み込んだサリアは顔を真っ赤にして怒った。そりゃあもう、大暴れ。

じゃじゃ馬姫と言うだけあって、彼女は武術には長けてるから抑え込むのには苦労した。本当に貰えるなら色んなトコの毛は採取したいが嫌なら嫌で構わないのだ。それでも寂しそうな顔で横に居られるより、怒ったり笑ったりしていた方がいい。

彼女は生きる顔をしていた方がいい。

「ウソウソ。サーリ、冗談を聞き分けることくらい覚えなさい」

それでも制裁は制裁として。暴れ散らして色々壊したサリアの頭に拳骨を落とした。

ふくれっ面で納得いつていないようだが構わず「モノを壊しちゃダメだぞお」と付け加える。

「ねえエイリ、エイリとサリだったら兄妹みたいだねえ」

「ああ……そうだな」

自分の横に膝を抱えたまま引っ付いているサリアは小さな花が綻ぶように笑った。

小さな愛しさが心に満ちていくような、そんな生活をここから始める。

しばらくして、エイリはこんな事を言いだした。

「オマエ、魔法遣えるようになりたいか？」

「うん」

「じゃあ、精霊文字を勉強しろ。あと、ある程度自分と相性の良さそうな精霊と仲良くしておけ」

「は？」

「精霊見えてるんだろ？それなら俺ら一般の魔道士とは違う方法になるけど魔法は遣えるようになる」

突拍子もない……… と思っただが、きつと彼は天才なのだ。今までどんな城のお抱え魔道士達も『緑の手』の治癒の力を抑えるなんて事はしてこなかった。『髪結い』として力を抑える紋章を刻まれていたとしても城の一画を燃やせるほどの力を持っていた。

(ついでにこの人は軍事能力にも長けている……… 多分)

馬術もそう。武術もそう。自分は何一つこの人に敵わなくて抑え込まれている。

ユーリには剣術では勝ったが、エイリとやって勝てる自信がないのだ。どうしてそんな彼が魔術の研究なんかに精を出すのか……。武術、魔術両方に長けている人物なら、騎士団に入と思う。あれは一応エリート集まりだ。

「どうということ？」

「召喚術って分かるか？」

「全然！私魔法の才能に早くから見限られてたから勉強しなかった」
「普通の魔法は精霊に力を借りるって言っただろ？召喚術は借りるんじゃなくてそのものを呼び出して魔法とする。多分オマエみたいなのはそれの方が合っている。方法は使役するでも、力を貸して貰うでも構わない。契約を交わして呼び出すことが出来れば、普通の魔法よりは大掛かりにはなるが魔法として発動する」

「つまりそこら辺にいる木霊や、水の精霊たちや……… 契約？どうやって？」

「さーあ？俺には見えてないからサリアが好かれているかどうかも分からないし」

と無責任な銀髪の魔道士は目を反らした。

周りの精霊をチラ見。まあね、嫌われてはいないと思う。

だって今まで自分のお願いを幾度となくきいて貰ってきた。だからこそ使役するってのは違う気がする。彼らは人間を友達に出来ない自分の唯一の友達だったから。だって、精霊には触れるし。

エイリの側にくっついていて炎の精霊に触れた。ニコニコ笑っているように見えるのは相性の良いエイリの側にいるせいだろう。

「力を……貸してくれる？」

エイリに言ったわけじゃなかったが、炎の精霊と同じくして彼も頷いた。

愛らしい炎の精霊とシンクロする彼にプツと吹きだして笑ってしまった。

「何？」

「いや……イヤイヤ」

「ともかくっ！天使文字で依頼すればちゃんと反応は返ってくる」

「反応？」

「それが魔法だよ」

「分かった」

勉強をしよう。

精霊のことも、精霊文字も、なんでも。

『緑の手』ということに甘えて魔法は出来ないなんて言ってもらえない。この世界を守るにはこの力では小さすぎるのだ。もっと色々出来るようにならねば。

「あっ！エイリ、研究にちゃんと使うなら他の毛も採取して良いよ？」

そう言った自分の言葉に驚いたエイリは積み上げた書物を崩して足に落としていた。

足を痛がりながらも自分の方に来ると彼が毎日綺麗に結い上げてくれる髪の毛をグシャグシャにかき混ぜた。

「バーカ！冗談だつて言っただろ？」

「私も冗談だよ！」

「冗談下っ手だなあ」

クシャクシャに笑う彼の顔が好きだ。

遠慮無しに乱暴に扱うその手は自分にとって初めての存在だった。この人の隣にいても良いって言われているようなその手が、自分の中に大きく降り積もっていく。

港は穏やかに波打っていた。

「ここ最近海が時化なくなっただね」

「季節風も強く吹かなくなっただね」

マグイラの治安も、自然の災害が無くなったことで安定してきた。まるで『緑の手』が出張してきているみたいだね、と冗談を言う者も居た。

その冗談を当の本人は複雑そうな顔で笑っていた。

その出張という言葉が表すように、グランローズ王国内の状況が芳しくない。サリアが彼の地を離れた途端に国中で災害が溢れ、騎士団が大忙らしい。王に対する反発も日に日に強くなっていると聞く。

あれから2年が経った。サリアももう17歳になる。

「エイリ、薬草はこれで揃ってるか確認して？」

「十分だ。しばらくはゆつくり休んでろ」

「うん。じゃあ後で裏のレンデルさんに声だけ掛けとく！少しでも腰治ると良いよねえ？ 漁師さんは身体が資本だもん」

「ああ」

彼女はグランローズ以外の各地を世直ししながらここで薬屋を構える自分のために各地の薬草を仕入れてくる。この二年、そうやって生きてきた。

サリアは召喚魔法については少し自由が利くようになっていたが普通の魔法は使えない。だが、自分が描いた護符を持たせれば他人からの攻撃魔法を無効化は出来るし、彼女自身は相当な腕前の剣士だからこの治安の悪いマグイラも含めて旅の道中を心配することもあり無かった。

今日の分の調合が終わると店先に座って小鳥が囀るように唄っているサリアの髪のに触れた。

「何？」

「久々に洗ってあげるよ」

「ええっ！いい！マジカンベン！」

「まあまあ！そう遠慮しないでっ！」

と彼女の腕を拘束するとぬるま湯で彼女の全身を濡らした。相変わらずの乱暴な洗髪を彼女は『洗濯』と呼んでいる。あんまり時間を掛けずに綺麗に洗ってあげてるのだから感謝して貰いたいぐらいだ。もつとも、丁寧に扱うことも出来るけどそれを望まないのは彼女自身なのだから誤解しないで頂きたい。

髪の毛を乾かすと2年分伸びて、一人では結いきれなくなった長い髪を拾い上げた。

「少し切るか？」

「ダメ。願掛けてる」

「あっそ」

ここからはいつも通り自分の仕事だ。髪の毛を少しずつ束にして細かく編み込む。本当はこれだって魔法で出来るけど、二年前のサリアは手の温もりに必要以上に飢えていたからなるべく直に触って結うのが暗黙の了解だった。

手を繋いで歩いたり、頭撫でたり、髪の毛結ったり。人に気にせず触れるのは初めてだって笑っていたのは一年前。

最近サリアは髪に触れると照れたように俯く。そろそろ思春期か？

「ほら、できた。カワイー」

「カワイインじゃなく動きやすいので良いのよ？簡単にで良いのよ？」

「女の子は可愛くしないと罪なんだよ」

「恥ずかしいオッサン……」

「俺まだ23歳！」

「私からみたらオヤジだもん！」

彼女はいつの間にか無邪気っぽく振る舞う術を身につけていた。

偉そうに『王族』のなんたるかを語っていた時代が懐かしい。護符を持たせてあるから人との接触も長時間じゃない限り治癒能力が

暴発することもない。王族でもない彼女はただ人に限りなく近い。

「サリ、丘に薬草を採りに行くぞ」

「私も行く！」

と、サリアは腕に絡みつくようにぶら下がった。『カワイイ』もこれは小猿のような愛らしさだ。特に城で澄ましていた時とは全然印象が違う。『烏姫』でもあの時はコイツなりに姫様だったってワケだ。

「サザン！クロス！」

彼女が呼ぶとすぐに二羽の鳥が寄ってきた。鷹であるサザンは放し飼いが当然だが、小鳥であるクロスですら彼女は籠に入れない。結構要領も良いもので、二羽で協力して狩猟（クロスが囿になってサザンが狩る）をしていたりもする。

こいつらは二年という歳月で感心するくらい強くなったし遅しくなった。

「エイリ？行こうよ」

「今親心を噛み締めてたんだよ」

「なにそれ？キシヨっ！」

「オマエなあ、俺がどれだけオマエの世間知らずに苦労したかつ！」

「エヘッ」

誤魔化して笑うサリアの頬を遠慮なく引つ張った。

実際彼女はなかなか人に頼らない性で窮地に立たされた時によりやく自分の出番が回ってくる。『苦勞』………なんてのは言葉のアヤだが、彼女自身は生活になれなくて色々辛かっただろう。

丘が見えてきて、青い空の彼方に浮かぶ城を見つめた。

神の領地、グランローズ王国はまだ辛うじて健在だ。

ユーリにもこの場所は伝えていないからあちらからここへ何か連絡してくることはない。サリアは何も言わないがユーリのことを気にしているだろう。

「サリ」

「はあい」

「グランローズで内乱が勃発しているらしい」

「は……？え……なんで……？」

「おかしな事でもないだろう？サリと俺があ国を出た時、既に内部は腐っていた」

「待って。父様は？」

「王が暗殺され掛けて危篤状態だというのが事の始まりだ」

サリアに酷なことを告げた。彼女が生唾を呑み込んだのが伝わってくる。

次の瞬間、丘から走って下りようとするのを腕を掴んで制止した。
「行つてどうするんだ？」

「父様を助けます！イリア姉様を助けます！内乱状態なら国民達の不感だつて募っているだろうし」

「オマエ、もう一度ちゃんと状況を見ろ！『緑の手』がもう一人ふらふら出てつたら今の『緑の手』は用済みだ。その価値があるうちはイリア様は安泰だよ」

立て続けに冷たいことを言つた。それでも事態を分かつて貰う必要があつた。いずれ黙つていても旅生活の多いサリアにこのニュースは伝わってしまう。酷でもそれは仕方ないと彼女が思えるまで言い続けなければいけなかつた。

「オマエが一人で出ていった所で何も変わらない」

「でもっ！イリアは生かされても父様やレンは殺されちゃう」

認識したくないためかサリアの声は徐々に小さくなつた。

平民が起こした内乱なら自分の実家だつてどうなっているかわからない状態だ。内部の正確な状況は伝わってこない。領地ルーンに行けば少しは正しい情報が伝わるだろうか？

「サリ、取り敢えずここから離れることにする」

「じゃあ！」

「城には行かない。でもこんな近くで店構えてたら捕まえてくれつて言つてるようなモノだ。暫くは隠れるんだよ」

そう告げて、彼女の手を強く引いた。今は離すことが出来なくて

握りしめることしか出来なかった。

暫くすると涙を噉るような音が後ろから聞こえてきた。

臆病になったもので後ろを振り向くことも出来ないまま、彼女が泣きやんでくれるのを手を繋いで待ち続けた。

遠くへ、と馬を走らせたつもりだった。

だが、その土地の人間の容姿を見てその場所がどこだか知る。

「ここは…… グランローズ？」

「そ。ここはルーン」

「ルーン？ ルミナス公爵の領地？ あっ！ エイリの実家！」

すっかり目の前に馬を走らせる黒衣の男が公爵家の人間だと言うことを失念していた。

自分も王族らしくないが、彼はもつと貴族らしくない。世間ズレしているというか世の中に妙に詳しいし、考えも平民寄りだ。

「その実家に匿って貰おうと思って。多分こんな内乱状態なら親父やユーリは城に詰めてるだろうからこんな辺境の地には帰ってこないし」

ユーリ、という名を久々に聞いて心臓が高鳴った。そう、だ。ここはユーリの実家でもある。

でもエイリに動揺したことを悟られなかった。平静を装って周りに視線を移す。

「今の状況を確認するのも、ここが一番確実ね」

「ああ。…… もう行くぞ」

美しく整えられた道と街道を彩る花の匂い、緑の多さに息を呑んだ。活気のある人々。姫であつた頃に抜け出して見てまわった民の顔色と違う。ここに民の不満はないようで内乱の影響など微塵もなかった。だからエイリもここへ一番に訪れたのだろう。王族が紛れ込んだ所で紛争など起きようもないような平和な街。ルーン…… ル

ミナス公って今まで（無理矢理婚約させられた件も含めて印象がよろしくなくって）あんまり好きじゃなかったが、政治家として素晴らしい腕を持っているのかもしれない。

エイリは馬を大きな屋敷のある方へ進ませた。後に続こうと馬の腹を軽く蹴り上げようとした時に街の人々の声が耳に入った。恰幅の良い女性が喋っている内容だけがしつかりと頭に入ってきた。

「王が処刑されるってウワサだよ。『緑の手』は力が抽出出来れば腕をもごとく構わないわけだしね」

前後の会話はよく分らない。でもその内容だけで、心臓が止まるかと思った。

いつそのことに気付かれてしまうだろうか、とイリアはいつも気を揉んでいた。自分達『緑の手』は人間を束ねる者ではなく、人間に搾取される側なのだ。

馬上から失礼してその女性に声を掛ける。

「その話は本当ですか？」

「え？ええ。私は最近城下から避難してきたから」

「ありがとうございます。十分です」

腰に差した脇差しを握り、向かおうとしていた方向と反対に手綱を引いた。

自分の気配を感じてエイリが歩みを止めるのも構わずに、グランローズ城の方へ馬を走らせていた。

自分の命はイリアと共に。

『世界を二人で守る』と誓った約束は、違えてはならない。それは植物状態のイリアと叶えたい約束ではないのだ。

エイリの制止の声。そんなものは聞いていられない。それでもすぐ彼の魔法の蔭が追い掛けてくる。エイリの命令で何人もの衛兵が驚きながらも自分の前に憚った。持っていた脇差しを抜いて躊躇い無く彼らを斬り下ろす。こんなところで足止め食っているわけには行かない。その一心で必死に道を作った。

だがエイリはあっさりと自分に追い付いてその進路を妨害する。

馬上の自分の身体を引きずり下ろすと、頬を思いつきり平手で殴りつけた。

「オマエのしたことを見ろっ！」

「え？」

「人を斬って、暴れ回って、それで自分の身内だけ助けるのか？何も考えずに突っ走って自分に都合の良い人間だけ助ければそれで良いのか？」

怒鳴られて堅く固まった身体をゆっくり馴染ませるように周りを見渡した。

『領主の息子が連れている黒髪の娘』というのが誰なのか、この街の者で分らない者は居なかったのだろう。自分が癩癩を起こすように斬りかかった兵は止めようとはしても攻撃をしてこようとはしていなかった。『烏姫』はそれだけ有名で、それだけで民は身を守るための攻撃すら出来なかったのだ。

涙がこぼれ落ちた。

治癒を司る能力を持っている自分が一番命を軽く扱っている。

治癒出来るから人を傷つけても構わないような気になっていた。

怪我は治っても斬られた心の傷も記憶も戻せないのに。

「ごめ………な、さい」

「俺に謝るな」

「は……い」

エイリが怪我をした衛兵を抱き起こす。その一人一人に泣きながら治癒を施した。

「ごめんなさい。私を止めてくれてありがとう」

一人一人にそう伝えた。

治癒が終わってそれを聞いた彼らは何故か一様に微笑んで自分を見つめていた。

全員が治癒を終えてもなかなか涙は止まらなかった。理由は父の処刑のせいだろう。

「王の………処刑はもう終わっているな」

先ほどの恰幅の良い女性にもう一度内容を聞いてきたエイリがそう告げた。

ここルーンはグランローズ城下から真剣に馬を飛ばして3日くらい掛かる。その女性が城下を離れる際に聞いた噂話だからとくに執行されておかしくない。冷静にならなければ、自分はただ無駄足を踏む所だった。

「オマエは取り敢えず目立ちすぎだ！全く！匿って貰うためにルーンに来たのにっ！」

「ごめんなさい」

「取り敢えず屋敷の中に入ろう」

「うん」

ふーっと溜め息を吐いた音が聞こえてきた。エイリは自分の馬を衛兵に預けると、エイリの乗ってきた馬の背に自分の身体を軽々と乗せた。

「え？え？」

「もうじゃじゃ馬姫には馬は与えない」

「もう逃げないよ」

「俺が！心配なんだよ。オマエは少しここで泣いてろ」

とエイリがその腕の中を指し示す。らしくなくてつい笑ってしまった。収まったその腕の中には肉親みたいな情を感じる。彼のぶっさらばうな優しさは心地よくて、お陰で涙は止まった。

そんな時間は掛からず、通りを抜けてすぐの一番大きな屋敷の前で馬から下ろされる。

騒ぎを聞きつけた屋敷の者達が主人の帰りを出迎えた。

更に、女主人と見受けられる女性が奥から出てきた。年の頃30半ばくらいだろうか？ユーリとよく似た金髪の女性。お姉さんなのかもしれない。

「母上」

「ええっ！母！若っ！？」

「サリア姫、ここでは姫らしくして下さい」

「あ…………失礼致しました」

長い平民生活ですっかり作法が飛んでおりました。エイリもすっかり猫被ってるし、やはりここは『サリア姫』の仮面は必要みたいだ。

外套を羽織った旅支度の格好に所作の美しさなどあまり役に立たないかもしれないが、しっかり足を地に付けて立ち、その女性に真実の名を名乗った。

「私はサリアⅡグランローズ」

それが周りの者の耳に伝わると同時に地に這い蹲るように頭を垂れた。それほどこの地には王族の威光が存在し、権威となっているのだ。なんだか物悲しくなりながらその頭数を見下ろした。

「頭を上げてください。私はご子息に助けられて2年の間生きてきました」

「サリア様を謀った愚息で御座います！なんとお詫びすればよいか

……………」

「本当に…エイリにはよくして貰いました」

（よく…………『洗濯』して貰ったし。よく殴られたし、よく実験だとか良いながらセクハラされたし…………あんまり良い思い出無いなあ）

と腹の底では思いながらも、エイリを褒め称えた。

自分の賛辞にようやく美しい夫人は顔を上げた。そして涙ながらにエイリを抱きしめた。

「姫様を守ったのね？騎士団にも入らずに何つにもする気のない引き籠もり息子だと思っていたけれどやれば出来るんじゃない！」

う、美しい……………と思っていたのにその語りっぷり。やっぱりユーリとエイリの母親だと確信した。

だけど安心した。エイリは一度も故郷のことや家族のことを言い出さないから仲が悪いのかとすら思っていた。それは自分が、グランローズの事に対して何も言わないせいだったのかもしれない。

「母上、父上とユーリはどうしてますか？」

「騎士団本部に詰めてますよ。当然、この有事ですから」

「内乱は誰が起こしたのですか？」

「詳しくは分かりません。でも内乱………というよりは政変というのが正しいのかも」

エイリと自分の唾を呑み込む音が重なった。夫人の語る内容が知りたいことの核心を突いていたから。

「既に、グランローズはレイニード王が制圧しました。民も、上級貴族も、騎士団も、それに異論は無く………まもなくこの内紛は終結します。ですからサリア姫は事を起こさずにここで事の成り行きを見ていた方が宜しいかと。事態が収束してからレイニード王に許しを請えば良いことです」

既に治癒能力の遣いすぎで体力は消耗していたのかもしれない。そのうえにこの事実が自分の身体の平衡を保てなくさせた。

レンが、父を処刑してイリアを幽閉した………その事実が頭を真っ白にさせた。

膝を地面について肩から落ちるような感覚。気の遠くなる中、エイリの手だけを必死に掴んでいたことを、覚えている。

「緑の手はその命が絶えるまで草木一本枯らすことは無い」

心臓が挟られるような感覚を覚えて目を開けた。

全身が心臓になったように鼓動の音が五月蠅い。

「大丈夫か？」

自分の腕の先に触れる手はいつものエイリの手だ。自分が握って離さずにいたことを理解して力を緩めた。

どうやらあの後の記憶がない所を考えて、倒れたらしい状況を推察した。姫様らしいことこの上ないが今更『姫』らしくなりたくはなかった。

ルミナス公爵家の屋敷の一室らしく、久々のふかふかのベッドが昔の記憶を引き起こしたのかもしれない。夢見が悪い。

「ごめん。付いててくれたの？」

「オマエが離さなかったから」

「ありがとう」

「少し寝ろ。倒れてから一時間も経ってない」

「今は、ちよつと寝るのが怖いかも」

「そう、か」

イリアの……『緑の手』は生きてさえすればその力を搾取することが出来る。腕をもごうと、足をもごうと、心臓が動いていればいい。レンがそんな方法を選ぶなんて考えたくもなかった。だが、同時にレンは双子の自分以外の姉達を良くは思っていないかった。

腹違いであるせい、他の王女はみんな自分に辛く当たった。ただ一人の王子であるレンは可愛がられてはいたが、差別意識や階級意識の強い姉たちに嫌悪感を抱いていたような印象はあった。

そして自分が『緑の手』を持つこと、イリアが自分の力を搾取していたことをあの聡い兄は薄々勘付いていた。

（だからユーリとの婚約を仕組み、イリアとの決別を喜んでいたんだ）

あの兄は行動することに必ず裏がある。ちゃんと意味がある。

あの日、サザンが空を飛んだ日だって、イリアの部屋について行くことは彼の作戦の一つだったのかもしれない。

まんまと自分を城の外に出して、手を汚す所を見せないその作戦の一つだったのかもしれない。

「エイリ、私はここで待つのが正しい？」

「何が正しいかなんて、俺が決める事じゃない。でもここで待つ方が小利口だとは思う」

「あのね、私……イリアの代わりになりたいんだけど」

「何言ってるんだ！」

戯れ言だと思われたのか、エイリはすぐ怒鳴って一蹴しようとし

た。でもちゃんと言い分はある。

混乱する頭を少しずつ整理しながら必死に言葉を探した。

「イリアは体が弱いから、そんな無理強いされれば長くは保たない

……と」

「そうだな」

「私が生まれたせいでイリアの『緑の手』の力が弱いのかもって…

……ずっと考えてて」

ずっと、心の中に出ていた痼りのようなモノから膿が出るように、言葉を吐きだした。

エイリは怪訝そうに見つめて次の自分の言葉を待つ。すぐ否定されると思ったが彼はちゃんと自分が答えを探すのを待ってくれるようだった。

涙は勝手に溢れ出た。それを拭わずに口許を抑えて嗚咽が漏れるのを堪えた。ちゃんと喋らなければいけない。

「力……を奪ってしまったなら、その使命までちゃんと奪わなければ！私、グランローズを咲かせてこの国を守りたい」

「オマエはオマエだろ？それはイリアのことすら馬鹿にしてる。イリアとサリアは別物だ」

「でもっ！！」

「サリアは、サリアだ」

エイリは言いながら目線を併せた。真剣な瞳に吸い込まれそうになった。この人は本気でそう言ってくれていた。

ずっと悩んでいた事をそれで片づけてしまうような彼の性格に何度助けられたことか……。ここまで一緒に居て、彼の存在にどれだけ救われただろうか。

そんな彼だから、自分の気持ちを分かって欲しかった。

目線を併せていた彼の頬にそっと口付けした。

「エイリ、ありがとう」

「サリ？」

「サリアとして、私はイリアを助けない。レンを止めたいの」

「サリ……行くのか？」

「うん。行く」

相変わらず涙は止まらなかったが何とか笑ってそれを告げた。エイリの腕が自分の頭をさらって額を擦り合わせる。しばらくそのまま二人で抱き合ってお互いを感じた。

それは色気のあるような抱擁ではなかったが、彼の優しさや彼の思いはしっかり染み込んでいくモノだった。

大好きなエイリ、困らせてばかりでゴメンナサイ。

大好きなエイリ、ちゃんと選ばせてくれてアリガトウ。

黒き賢帝と緑の女神

？・黒き賢帝と緑の女神

最後になるかもしれない、二人ともそう感じていた。

髪の毛に触れる彼の指はいつも以上に優しくて丁寧だった。

いつも以上の溢れるほどの気持ちを浴びるようで、胸が苦しくなった。

「エイリ」

「ん？」

「今日は……可愛くしてね？」

「なんだ？珍しい」

「だって、私は凱旋帰国するんだもの。久々に故郷に帰るんだもん。イリア姉様に大人になった姿見せるのよ？」

「可愛くしてあげるから、安心しなよ」

肩の力をほぐすように彼の大きな手が軽く肩をなぞって下りていく。

手はすぐに髪の毛に戻って梳いていく。長い指が魔法を掛けるように動いた。少しずつ分けた髪の毛が器用に細かく編み込まれていく。

最初は『洗濯』だったから嫌だったけど、いつの間にか触って貰うことが気持ち良くて頭を素直に差し出していたんだ。これまで何度となく結って貰い、自分からも躊躇いなく触った。

城に戻れば、その時間は終わる。

なかなか今の気持ちを言葉に出来ずに鏡に映る自分を見つめた。美しい金系の刺繍が施された騎士団の正装と団章を胸に付け、心は決まっているはずなのに情けない顔でそこに映る小さな少女。数年前、甲冑を付けて武道大会に出た頃には考えられない自身の表情に些か呆れた。ここまでエイリやルミナス公爵家を巻き込んだのは自

分だというのに……。

エイリがその様子に気付いて結ってる手を止め、何かを言おうとした。

その瞬間、二人の時間を壊すように後ろでガシャンと何かを倒すような音が聞こえてくる。

はっとして振り返るとエイリが髪を掴んだまま眉を顰めていた。その視線の先にはルミナス夫人が花瓶を倒して大げさに仰け反っている。

「母上、なんですか？」

「あああああ、あ、アナタっ！？ 姫様の髪の毛に触れるなんてどういっつもりっ！？」

「どういうも……俺は彼女の『髪結い』ですから」

「か？ かか髪結い？？ 公爵家の人間がっ！？ 『髪結い』？？」

「ユーリに頼まれたんで。今でこそ『髪結い』の紋章は無いですけど城にいた時から正式に彼女の『髪結い』をやってましたよ」

エイリはしらっと答えて続きを編み込んだ。

彼の母は「ああ『髪結い』」と納得した風に一度頷いた。だが全て呑み込んだ後におかしいと気付いたらしくもう一度食って掛かってきた。

「エイリっ！ アナタは魔法が遣えるのに何で手で髪を編んでるんですかっ！！『髪結い』って言うのはそう言うモノではありません！」

「そうでしたっけ？ でも手でもちゃんと出来るんだからどっちでも良いじゃないですか？『緑の手』に対する『髪結い』なら主人に触れるのは御法度だけどそうじゃないなら別に構わないでしょ？ ねえ、サリア様」

親子ゲンカならこちらに話を振らないで頂きたいと思ったが、実際おかしいのは自分達だ。言い訳無用のこの場でどう言ったらいいものか、迷いながら目を泳がせた。

「えーっ……………」

「サリア様！ 大変無礼を！」

「いえ、私が嫌がらなかったんです。私は、一般の魔法を使う『髪結い』はあんまり好きじゃなくて、専属を持つていなかったんです」
「まあ……さすが『烏姫』。変わってますねえ」

アナタのテンポも随分変わってます。そう思ったのは心の中に伏せておくことにした。

エイリの長い指が丁寧に編み込んだ髪の毛の中に細い金色のリボンを緩く編み込んで横に流した。今着る騎士団の正装に併せた金のリボンに彼なりの『髪結い』のプライドと心遣いが見えた。

出来上がりを告げるように髪の毛には祝福の口付けを。その饒別を受け取って立ち上がると気持ちを切り替えて笑った。

「ありがとう」

「サリ、行くぞ！」

エイリは手を差し伸べた。

それは決して姫君に差し出された手ではない。

一緒に行く者への手だと勝手に解釈して勇んで掴んだ。

——伝説は語る。

——『緑の手』は女である、と。

グランローズ城は今も美しく変わりのない。北塔は二年前のままの焼けこげだったが、南塔は今も美しい碧白い壁面でその建物の秀逸さを誇っていた。

まだあの小鳥はあそこで飼われているのだろうか？

ここで天空を見上げればあの窓から琴の音が聞こえてくるのだろうか？

肩に留まっていた浅葱色の小鳥が帰ってきたことを単純に喜ぶよ

うに周囲を旋回した。

だが、黒い鷹は城の変わってしまった雰囲気警戒して自分の側から離れようとはしなかった。

変わった。兵の配置、武器の多さ、民の少なさ。

まるで他国からの移民の土産話に聞いた軍事国家のような物々しさ。

グランローズであるのに、グランローズには有り得ないと思っていた光景。

これが自分の知るレンのした事とは到底思えなくて、信じがたくて何度も確かめるように目を擦った。

「エイリ。ここでユーリを探してて」

「サリは？」

「城に行く」

「俺も行こう」

「ダメ。ここからは私の問題」

「ユーリも城にいる可能性の方が高い」

無理に押しきる黒衣の魔法使いに呆れながらも後方を任せた。

白いマントを翻して城門の前に立つ。目立つ姿ではあるが逃げも隠れもしない。そのつもりで騎士団の正装を選んだのだ。

自分の姿を認めた兵士がバタバタと中に報告に掛けていくのが見えた。

「簡単に入れそうだ」

エイリが呟いた。彼はきつと無理矢理魔法でこじ開ける方を想定していたのだろう。でも自分は中に招き入れられてからの方が問題だと知っていた。

多分、レンは自分を簡単には帰してくれないと思う。

「本当に良いの？エイリは別に私と一緒に来る筋合いなんて無いでしょ？」

「今更オマエそんなこと気にしてたのか？」

「だって………今度はお給金とかの話じゃ済まないし」

「オマエから今更給料貰おうなんて思ってない」

「でも『髪結い』なんでしょ？ 私達の関係って……」

エイリの指が遠慮無しにホッペを引っ張った。

「いひゃあい」

「ずっとそう思ってたのか？ 心外だな」

「ちち、ち、違うの？」

「俺はお前に興味があるからここから連れ出したんだよ。お前が帰りたいて言うから一緒に来たんだ。お前じゃなきゃどこかで放つてよ」

そう言ったエイリはゆっくり自分の肩を押し出した。ちょうど重い門が開く。

「大丈夫。お前にはずっと俺がついてる」

「うん」

結局最後まで納得出来なかったけど、ここで心強い理由は分かっている。

エイリはちゃんと自分を分かってくれてる。自分がやりたいことも、全てちゃんと見てくれてる。その上で、ちゃんと後ろで見守ってくれる。

門を潜って中庭を抜けた。誰かが案内するわけでもなく、兵達は遠巻きに見ているだけだった。中には見覚えのある人間もいて、城の全てが変わったわけではないことを証明していた。

ただ極端に華やかさが減ったような印象は、そこら中に巣くうように居着いていた貴族共がいなくなっただけなのかもしれない。確かに奴等は排除に値する。偉そうにしているがその実、自分の領地すらまともに管理出来ていない者が多かった。

ルミナス公のようにしっかりと統治を出来ているなら偉そうにここで歩いて貰っても構わないが、そうでないなら離れるべきではない。そもそもちゃんと統治をするためにはここでチャラチャラしている暇はないものだ。……とレンと話をしていたことがある。もしもレンがあの時幼い自分達が語った理想を実現したならそれ

は随分と恐ろしいことだ。自分もレンも、幼かった。

それは年齢の問題ではなく、この『城』という箱庭にいるお陰で成長のない生活を送ってしまったせいなのだ。外を見てきた自分と違って、ここから出ていない彼は今でもあの理想を全てとしているのではないか。それは恐ろしいことだ。

城内への扉が開かれて、謁見の間までの道だけ警備の者が立っていないかった。それ以外の道には物々しいくらいに兵が立っている。誘導されるようにそちらの方に歩くのは物凄く居心地が悪い。だが用事があるのもそちら側だ。

謁見の間へ入るとすぐに扉は閉められた。閉じ込められたような気分になり後ろを振り返る。後ろで控えていたエイリが前に集中しろとばかりに首を振った。

外と違い、謁見の間には人の気配がほとんど無い。前にはただ二人、見覚えのある男性がそこには居た。

自分と同じ顔立ちだったはずのレイニードが黒衣にマントを羽織って。それにエイリと同じ顔を持ったユーリがお揃いの騎士団の正装で。

「鏡みたいだね？」

レンが突然自分達に向けて口を開いた。

「え？」

「だって、サーリアも僕もそっくり。ユーリも弟とそっくり」

そう言って二年前と何にも変わらない彼はクスクスと花のように笑った。

（変わらな過ぎ…で…しょ？）

ユーリは二年前より少しシャープになった。エイリと似てると思っていたのに全く違う。

レンは……… 17歳になったなら自分の姿形とは変わっていて当然なのに、その成長を無理に止めているように変わっていないかった。むしろ、自分の方だけが二年分女になってしまったようで気持ちが悪い。

ずっと昔は同じだったモノ。今はお互い、道を分かち生きている別モノ。

父すら殺してその先に何を見たのか。
もしかしたら自分の未来だったかもしれないその身体に恐怖を抱いた。

自分はあるのまま城に残っていたならば、彼と同じ道を歩んでいたのかもしれない。

『正義』という名の下に父の犠牲を厭わなかったのかもしれない。顔を悪くした自分の考えを読むように彼は手を差し伸べた。

「サーリア、おいで？この玉座はサーリアのために手に入れたんだよ。二人でこの国を支配しよう」

「レン、姉様は？」

「『緑の手』はちゃんとその役目を果たしてる」
「役目？」

「グランローズを咲かせるために、ずっとこの城の地下で力を抽出しているよ」

「そんなっ！！ずっと力を使ったらイリア姉様は死んじゃう！レンだって……知ってるでしょ？」

「『緑の手』なんて新生グランローズには不必要だ」

はつきりとレンは嫌悪感を顕わにした。ずっと彼はこの制度を嫌っていた。

近親婚を行ってまで無理矢理造っている『緑の手』が不自然だ、と。

自分もそう思っていた。

だが、あの時代の王達はそれ以外の方法を選べなかったし、それによって得ていた恩恵は素晴らしいモノだった。

イリアが花を咲かせられなかったのは誤算だったのかもしれないが、そこまでして無理矢理ねじ曲げなくても良かったんじゃないの？

「古い仕来りは革命でも起きない限り覆らないわ！」

「壊して造る！それが私の理想。ね、レン」

なんて幼い考えだったのだろう。人間は時間を掛けて話し合うことだって、努力をして作り上げていくことだって出来るのに。

「私は……この手は『緑の手』です。姉様と交代させて下さい」

「ダメだよ。サリアは僕の側で笑ってて？」

「レン、私はイリア姉様が健在じゃなきゃ笑えません」

「サリア、言うことを聞きなさい」

そうレンが言った。その瞬間に傍らに立っていたユーリが剣を抜いて何かを叫んだ。

一斉に兵士達が自分を取り囲み、エイリと離されて隔離された。全てが一瞬の出来事だった。

悪夢のような……出来事だった。

「どういう事だった！兄貴！」

「エイリ、サリア様をお守りしてくれてありがとう。レイニード王も君に恩赦を与えると云っていたよ。城を焼いたことは不問にするそう。また研究所に戻ると良い」

ユーリは口早に厄介払いの口上を並べ立てた。そんなのを簡単に納得出来るほどサリアとのこの二年は短くなかった。

「ユーリ、サリアはお前の婚約者だろ？」

「サリア様はレイニード様のモノだよ。もうすぐサリア様も戴冠される」

常識で理解出来ないことをユーリが口にした。『戴冠』って何のことだか……レイニードの嫁になることって考えに及ぶまで時間が掛かった。

「ちよつ、待てよ……サリアはずっと兄貴のことがっ！」

「レイニード様にはサリア様が必要だ。まだこのグランローズは落ち着いていない。『緑の手』が君臨している必要は無くなったが、『緑の手』の力は秘密裏に必要な。サリア様が子を成せば『緑の手』

は絶えることなくこの国を守る」

つまり、統治の方法は以前と全く変わらない。腐ったままというわけだ。

ただ貴族を排除するためだけ前の王は処刑され、貴族達は領土を取り上げられたのだとしたら……。

「兄貴、俺はサリアの『髪結い』だ。城に彼女を迎えに行く」

「エイリ！」

「兄貴は変わった！この国を変えたいって言うたのはこんな方法だったのか！？こんな私利私欲のための革命っ！」

「エイリ、レイニード様はサリア様のこと以外は……平等に冷静に考えられる素晴らしい指導者だ。だが、まだ若い。サリア様のように横で支える人間だって必要なんだよ」

「サリアだけ我慢しろって？そんなの今までの『緑の手』となんら変わらない！」

「じゃあエイリはサリア様のせいでグランローズが滅ぶのは構わないのか？それこそ彼女は一生後悔する」

「あいつはきつと他の方法を考える」

呟くように言った。ユーリは少し驚いたような顔をした。

二年という月日は意外に長くて、サリアのことを分かっているつもりだったユーリは何もかも記憶と共に風化させていたのかもしれない。サリアはそんなに弱くない。ちゃんと前へ切り開いていける力を持っている。

黒く重い法衣を脱ぎ捨てて身軽になると、壁に掛けてあった剣を掴み取った。ユーリはそれすら目を反らす。

「兄貴は何も見なかったことにして良い。俺は……行く」

この国にとっては兄貴の方が正しいなんて分かっている。

でもその道は自分には正しすぎる。

守りたいモノを棄ててまで歩く道はきつと険しいモノだろう。

ユーリの腕はきつと色々なモノを背負っていて、サリアを犠牲にする代わりに色々なモノを守って生きている。

同じように生まれて、同じような教育を受けたとしても、道は幾つも分かれていて、選び取ったモノは全然違っていた。

自分のこの腕は、守りたいモノ一つだけを掴み取るためだけではない。

すぐにここがどこだか分かった。

何度も通ったその場所は、この城内で一番美しい部屋。南塔の最上階に在る『緑の手』のために造られた部屋だ。

「出してっ！」

5人……男共が怒鳴って暴れる自分の身体を押さえた。すぐさま武器になるようなものは全て取り上げられる。奥から魔道士らしき法衣の男性が自分の衣服を騎士団のそれから美しいドレスに変化させた。一緒に腕に枷を付けることも忘れない。

それでも暴れ散らす自分を見兼ねたその魔道士は枷に更なる重りを付けた。腕を上げることもままなくなってしまう。仕方なくその場にしゃがみ込んだ。

「姫様、どうぞ椅子にお掛け下さい」

侍女が椅子を持ってきてそう言ったが首を横に振って断った。

様子を一部始終見た兵士は、侍女をその場で見せつけるように鞭打った。

絶句した。小鳥を逃がしたらそれを侍女のせいにされて鞭で打たれていた、とイリアに聞いたことがある。それと同じ事が目の前で行われているのだ。自分はすぐさま椅子に座ってそのむち打ちを止めるように懇願した。

気が狂いそうになる。これではイリアに替わってここで飼われることになっただけだ。

そのうち、見覚えのある頬から肩に掛けて紋章のある男が入ってきた。イリアの『髪結い』だった男だ。相変わらず美しい所を見る

と、イリアから生命力を絞れるだけ搾り取ったのだろう。

嫌悪を顕わにして睨み付けても彼は全然動じない。

「サリア様、今日から私は貴方の『髪結い』で御座います」

優雅に挨拶を済ませてエイリが編んでくれたリボンを魔法で解いた。

「止めてっ！」

「御髪が乱れております。直しますよ」

「やだっ！」

「そんなことを言っただけで長い髪には『髪結い』が必要でしょう？」

「私の『髪結い』はエイリだけですっ！」

「今日からは私だけが『髪結い』です」

暴れようとする自分を抑えるためにもう一度兵士達が近付いてきた。隙について兵士の一人から剣を奪うと長い髪を勢い良く切り落とした。

枷の付いた腕ではすぐに剣は奪い返された。しかも今度は一步も動けないように椅子に縛り付けられてしまった。だが、これなら自分に『髪結い』は必要としない。勝ち誇ったように『髪結い』に向かって微笑んだ。

その場にいる一同に気遣いを見るような視線を投げ掛けられたが、同時にイリアの『髪結い』は諦めて渋々外に出ていった。

侍女達にも負け犬の遠吠えよろしく睨みを利かせた。触ったら噛みつくぞーって。

みんな自分が何も出来ないこと知って出ていった。監禁が出来れば取り敢えずは良いのだろう。

重力に任せて首をもたげると、切り落とした髪の毛と一緒に涙が胸元のフリルに落ちるのが見えた。

「う……………うっっ」

呻くように泣いた。バラバラの髪の毛が頬に掛かった。女性が肩より短く髪の毛を切るなんて女を棄てたようなものだ。頭の隅っこにいつでも存在していた次期ルミナス公爵はもう自分の味方ではな

いの、まだこの髪の毛のように未練を残してしまう。

散乱した髪の毛と一緒に金糸のリボンが地面に落ちているのを見つめる。エイリが結んでくれたそれは彼がトンと肩を押し出してくれたことを思い出させた。

今は感情に任せて涙を流している場合ではない。ここの状況を一刻も早く理解せねばならなかった。

すぐに涙を止めて、鼻を吸いながらではあったが周りを見渡す。

『烏姫』が魔法が遣えないことは内外共に有名だったから監禁方に魔封じは存在していなかった。

それは有り難く利用させて貰うことにする。

ランプの炎に向かって話しかけた。

「サザン、私の声が聞こえる？」

「はい。サリア」

すぐに深い落ち着いた声が耳に直接響いた。炎が揺らいで魔法陣が浮かび上がった。耳鳴りのするくらいの高周波が次元を割く音だつてエイリは言っていた。音が止むといつの間にか次元を渡ってサザンはそこに黒い翼を下ろしていた。

「炎が……近くに在って良かったです」

この二年の間に自分が最も変わったこと。

サザンは炎の精霊として自分と契約してくれた。

精霊文字を理解し、彼らと契約を交わすと精霊の召喚は自然と出来るようになっていた。エイリは当然だと笑っていた。『緑の手』は精霊寄りなのだから友達に何かをして貰うように頼んでるのと一緒だよ、と……簡単に言っただけだ。

その結果がサザンの炎の精霊化で、クロスが風の精霊化だった。決して初めから精霊だったわけではない。だが、命在る者……尽きるべき時が来る者が『緑の手』と長く居るせいで理を変えて彼らも精霊側に近くなっていたのだ、とエイリは言った。そのお陰で難しい召喚魔法も炎と風に至っては使うことが容易になった。

少し間を置いて高周波と共に鎌鼬に乗ってクロスも現れた。

「クロス、この拘束を解ける？」

「お安いご用です」

サザンよりも少し甲高い声で返事をする。クロスが拘束具を切り刻んだ。自由になった手を確認して立ち上がる。

こうなつてはこの南塔に拘束されたことを感謝しなければならぬ。この部屋……『緑の手』の部屋からグランローズの間までは一本道だ。

「サザン、クロス、付いてきて！」

「はい」

ここから先は自分も入ったことのない、『緑の手』だけに赦された場所。

本当は一生縁のないものでいてほしかった。

扉を開けるとカビ臭さが鼻に付く。この道はここから地下に延びていて、もう地上に接する所はない。長い螺旋階段は歴代の『緑の手』が気が狂うまで通った道だろう。

建物の切り返しのような部分を抜けると更にヒンヤリした空気が身体を纏った。多分ここから地下に入った。

「サザン……火を焚ける？」

「はい」

松明などは持っていなかったからサザン自身その身体にが炎を纏った。足下が明るくなつて階段の終わりを照らす。

初めて向かうグランローズの間はそんなに深い場所ではないらしい。本当に玉座のすぐ下辺りなのだろう。

大きな扉を両手で押し開けると目に入ってきた光景にそのまま固まった。

「ね……姉様っ！」

「サ……リ」

聞こえないくらいの小さな声。細く枯れたような身体がグランローズだと思われる蕾の上につるされていた。

『抽出』という言葉そのまま表したような状態。呆けている場

合ではないことを理解してすぐさま駆け寄って拘束具を外す。

「姉様！」

『緑の手』に『緑の手』の力は利かない。そのはずなのに自分の手がその枯れ木のように細い手を掴むと青白い力が発動した。彼女がもう『緑の手』ではなくなってしまった証拠なのか、それほどまでに弱っている証拠なのか……。

「サリア！逃げなさいっ！レンはあなたのことを」

喋れるようになったイリアは開口一番に言った。だが今の彼女を一人に出来るほど自分は賢く生きられない。都合良く頭を切り換えられるようならここに来ては居ないのだ。

ゆっくり頭を振ってイリアの身体を抱きしめた。治癒の魔法の光が徐々に小さくなっていく。イリアが少し元気になったのを確認して身体を離れた。

「私、イリア姉様を助けに来たの」

「助け………に？」

「だって、私達姉妹だもの。困った時は助け合うように、お父様もそれを望んでるわ」

そう言って笑った。イリアは代わりに崩れるように泣いた。

クロスが真の主を慰めるように側に飛び回る。クロスの声はイリアに聞こえないかもしれないが、自分にはちゃんと聞こえている。

「イリア、泣かないで。みんな君を愛してる」

自分も、クロスも、みんなイリアを愛してる。

何かの気配を感じたのとサザンが鳴いたのは同時だった。だれか、来る。何か砂利のような物を擦る音に身構えた。

「サリ」

「エイリ！？どうやってここに？」

「穴開けた」

信じられない。………が過去に城を燃やして脱獄を成功させた犯人なのだからその魔力と行動力はお墨付きだ。

だが彼がここまで来てくれると思わなくて何度も目を擦ってみた。

それでもその銀髪は変わらない。金髪にはならないのだ。

そう、自分はユーリが来ると信じていた。それがただの幻想だと知っていても、白馬の王子様はユーリだと信じて止まなかった。

だから砕かれた幻想に涙が零れた。助けに来てくれたエイリには失礼だと分かっていたいながら。

「おいっ！今は泣くな！」

「むしろ今だけ泣かせて！」

「空気読め！周りを見ろっ！」

「分かってます！でも……止まらない」

溢れる涙を拭いながらも立ち上がるとエイリが手を握ってそのまま身体を抱き寄せた。彼の手が短くなってしまった髪の毛を掬った。耳元で舌打ちをするのが聞こえてくる。

「切っちゃった」

「バラバラだ。自分でやったのか？」

「うん。エイリ以外に触られなくなかったから」

「結う髪の毛無くなったら俺の意味がなくなるじゃないか」

「エイリの……意味はここに来てくれたことだよ」

ユーリが来なかった場所にエイリが一人で来た。

それがエイリの意味だ。だからずっと自分達は一緒に暮らしてきた。

「外に………」

「エイリ待つて！私グランローズを」

咲かせなきゃ、と続けようとした。クロスが彼の薔の上に留まると灰が崩れるように脆く落ちていった。それを見て叫びそうになったのをエイリが間一髪、後ろから口を塞いだ。

「劣化してんだ。仕方ない」

「仕方ないで済まないでしょっ！？あれは国宝なのにつ！」

「グランローズを必要としない国造りをしようとしていた者が王になったんだから、その時代の移り変わりで消えたんだろ。丁度いいタイミングだ」

その無理矢理の理由付けに後ろで聞いていたイリアが笑った。焦っているのは自分だけのようで肩から力が抜け落ちる。

「サリア、ごめんなさい。私あなたがグランローズを咲かせたら……きつとあなたを恨んでしまったと思うの。素直に喜べはしなかったわ。だからこれで良かった」

やつれてとても綺麗とは言えないイリアだったが、その笑顔は生き生きとしていた。人形のようなだった精気のない表情から生きた人間の顔になる。グランローズの蕾が無くなることで『緑の手』だった彼女も人間に戻ったのだ。

後は、レンさえどうにか出来れば……。

そう思ってすぐ上の玉座を思い描いて天井を見上げた。

「おい！行くぞ」

エイリはイリアの身体を荷物のように抱き上げて自分に声を掛けた。扉を出ると右に南塔への道、左に玉座の裏に続く道。そして前にエイリの開けた穴があった。

エイリはその穴に迷わず入ろうとした。だが自分だけはそこに入るわけには行かなかった。

「エイリはイリア姉様を連れて外へ……」

「お前も一緒に行くに決まってるだろ？」

「私、レンに話があるの。イリア姉様はまだ安静が必要だから早く外へ出してあげて」

エイリはダメだと言うように首を横に振った。更に横からイリアの細い腕が自分の腕をしっかりと掴んだ。

「私もサリアと行きます」

「え？姉様には無理よっ！」

「行きます。この国をあなたに背負わせるわけには参りません。もちろん……レイニードにも」

振り解こうと思えば簡単に振り解けたはず。でも覚悟を決めたような表情のイリアにそれが出来なかった。そんな姉妹を前にエイリは少し苛立ったような顔を見せたが、仕方ないとばかりに向かう進

路を左に変えた。

「エイリ、ごめんね」

「サリ、お前は何か分かっていない。そう言う時は『アリガトウ』
って言うんだ」

「うん………アリガトウ」

出過ぎた真似が目につきすぎるいつまでも美しい『髪結い』は、
イリアの『髪結い』だったから生かしておいたと言うことを分かつ
ていないらしい。

サリアが自分の髪を切り捨てて彼の手を拒んだことを言いつける
ように自分に報告していた。

ウンザリするくらい「自分は悪くない」と並べ立てる。聞いてい
るだけで胸くそ悪くなるその言い分に呆れてるのを通り越して感心
すら覚えた。

適当に流して聞いて横に立つユーリ＝ルミナスに視線を移す。彼
が分かったと言うように頷いた。

「もう、良いよ。サリアが迷惑掛けたね。『髪結い』はもう必要が
ないようだから君はここにいない必要がない。解雇だ」

「え……………」

「この城に他の姫は居ない。今までの悪政のお陰で必要ない者をい
つまでも雇っておけるほどグランローズは裕福ではないんだ」

ふーっとわざとらしい溜め息が合図だ。ユーリは反論しようとす
るその『髪結い』を取り押さえて引きずり出した。元々身分の低い
魔道士だったらしい彼は目上の者に対する作法を全く弁えておらず、
許可をしていないのに勝手に口を利く。勝手に城内を我が物のよう
に歩き回る。サリアのお陰ですつと煩わしいと思っていた蠅を追
払えたようで一つスッキリした。

貴族以外の殺生を行うつもりは無かった。だが噂が先行して勝手

に城の者は自分に対するイメージを『父殺しの王』とか『血の玉座に座る』とか、色々言っているようだ。今追い出された彼も、自分が殺されるのではないかと脅えているに違いない。殺す価値も無い者のために手を汚しはしないのに。

父の死は必要だった。姉たち、姫の死は諸侯達を従わせるための見せしめに処刑した。まだ従わない貴族はやはりその下の下級貴族への見せしめに処刑した。この一ヶ月ぐらいで何人の処刑を執行したか覚えていない。

それ程まで深くこのグランローズは腐っていて、犠牲なしでの変革は難しかった。

遠回りになるが他の方法だってあることは知っている。でもそれを選べば自分の代だけで終わらないことも分かっていた。

世の理を正すには嫌われ者も必要だということ。自分の所業は1000年経った後に認められればいい。1000年後を考えた改革なのだから。

「レイニード様」

「ユーリ、悪いね。ああいう輩を相手にするのは苦手なんだ」

「あなたの手を煩わせることではないです。お気になさらずに」

ユーリはそう言って苦笑した。

彼は結局サリアと結ばれることなく自分の片腕として騎士団総指揮官の任を勤めている。有能な男で、この有事に最も功績を残した男だ。

早くから自分を王に据え、改革を起こすつもりだったらしい。沢山説得され、沢山政治を語り合った。サリアをイリアから引き離すことも、この男のお陰ですんなりと成功した。

だが彼を自分が気に入ると同じように、サリアもこの男を気に入ったのは誤算だった。

「サリアの様子を見てくるよ。ユーリも来る？」

「……………はい。お供致します」

片腕には違いない彼も、信用にならない部分がある。サリアの名

前を出すと少しユーリの感情が動くからだ。

いつも優男の仮面を被ったままニコニコと微笑んで剣を振り下ろすこの男が、サリアの名前を出すと一瞬絶望を味わうような表情をする。本当に我が妹ながら恐ろしい。あんな短い期間で彼のことを骨抜きにしまうのだから。

（でも、サリアは僕のだよ。君もちゃんと弁えてね）

あの娘は王の隣に相応しい。

稀な力、稀な容姿、知力。人を惹き付けるその力。あれは王者の女だ。

だから王になろうと思ったのか、王になるのに彼女を必要としたのか。もう分からないくらい前から彼女を欲していた。

グランローズ王国の近親婚なんて風習が無ければこんなこと思いもせず、ちゃんと妹として愛せたのかもしれない。ユーリの元に嫁ぐことを心から祝福出来たのかもしれない。芽生え始めていた独占欲を心の底に封印出来たのかもしれない。

でも神は、彼女を手に入れるべく自分のもとにも力を分けたのだ。

「ユーリ、行こう」

彼に微笑んだ。

このグランローズが最後に選んだ者は、結局女ではなかった。

この右手に宿りし力は、命をもたらすモノではなかった。

ただ、この髪の毛や瞳に現れた色彩は妹のモノを奪うように『緑の手』と同じ擬態をした。

『緑の手』が神の使いなら、自分は死神の使いだ。『赤の手』とでも呼ぼう。

「レイニード様」

「なあに？」

「イリア様のご様子を見に行かれた方が宜しいのでは？あそこは王以外は近寄れません。レイニード様のご命令がなければ……」

「ユーリ、イリアは死んで良いんだよ」

そう言った自分の顔をユーリは驚いた顔で見つめ返した。ユーリ

だとして分かっていたことだろう。自分には肉親の情など無い。いや、自分にはサリア以外の肉親が元々居ない。そのサリアだって、肉親の情ではなく、色恋を感じて止まないのだから、もうとうに自分はおかしいのだ。

今更、だ。

「ユーリ、行こう」

念を押すように彼に言った。

玉座の後ろにある大きな黒い扉を開けば、この城の腐った部分が顕わになる。

それを最初に見た時、自分はただ涙を流した。

民も、王族も、『緑の手』も、みんな……自分も。

長い間こんなものに縛られて生きてきたのだと、知りたくなかったんだ。

そう、思ってそれを背にした。

その黒い扉は自分達を繋げてしまった。

放っておいたつてところで避けられようのない事態だっただろう。それほどまでにこの世界は病んでいて、自分達は無力でしか有り得なかった。

この小さな力が幾つ集まろうとも、世界には何の影響も与えられないって……。

扉を開けると彼がこちらを見て悠然と微笑んだ。

自分の良く知る兄が、自分の知らない男になっていく。

「今、僕の方から行こうと思っっていたんだよ」

「レン、今グランローズの薔も落ちたわ。私達は解放されたの」

「サーリア、君を自由にしてあげられるのは僕だけだよ」

当然だとも言うような兄の口振りに頭痛を覚えた。

そしてエイリの腕の中に居るイリアに視線をやると虫けらでも見

るように顔を顰めた。

その瞬間、兄妹の再会を嘲笑うように身体に大きな縦揺れを感じる。

何事かすぐに理解出来ずに打ち付けた身体のあちこちをさすって自らの無事を確認した。エイリがいるからイリアは無事のようだ。レンも辺りを見渡していたが特に怪我は無さそう。ただ城が所々崩壊している。先ほど自分達が通ってきた地下に繋がる扉を埋めるように石造りの壁が落ちてきていた。小刻みに揺れは続く。

石造りの街並みを嘲笑うかのような大地震が今この地を襲っていた。その事態を一番早く理解したのはレイニードだった。側にいたユーリに声を掛け、街や城への騎士団の派遣を命じている姿は自らの目指した王そのものだった。方法は違えど、彼と自分の理想は一緒なのだ。

命令に一区切り付けたレンはこちらに向かって問いかけた。

「グランローズの……蕾が落ちたって？」

「ええ。さっき……」

「グランローズ王国は見放されたか」

「え？」

「イリア姉様とサーリアは精霊が見えている？」

「え？」

レンとイリアを交互に見つめた。イリアは暫くしてイイエと小さく答えた。

「サーリアは見えてるね？サザンとクロスに宿ってる」

すぐに二羽の存在を見抜いたレンだって見えていることになる。

『緑の手』は自分とイリアだけでは無かったのか。

混乱する頭を整理しながらレイニードをもう一度見つめた。

「僕は小さな頃から知っていたんだ。サーリアが『緑の手』だということも、イリアが『緑の手』ではなくっていくと言ったことも。

……僕がイリアから『緑の手』を奪っていることも」

「何を………言っ………」

「本当のことだ。僕はイリアの『緑の手』を使ってこの国を統治しようとした。でも力が足りなすぎたようだ」

ふーっと溜め息を吐いた音が聞こえてきた。そして自分の腕をすぐさま掴んだ。イリアが何かを叫んだのと同時に。

身を強ばらしている場合ではなかった。必死にその腕を抵抗しようとした。武器という武器を持っていなかったから素手で揉み合った。

エイリがイリアをその場に下ろしてこちらに駆け寄るのも見えた。だがそれより早く力が抜ける。

「ああ………やっぱりサーリアの方が強い『緑の手』を持ってるね」
レンが栄養を貰って咲き誇るように微笑んだ。彼の手に触れられただけだ。触れられただけで力が抜ける。そんな力聞いたことがない。まるで『緑の手』と正反対で……。

「サーリア、ちゃんと力は有効利用してあげるから」

そう言っただけでレンは手を広げた。すぐに精霊が彼の周りを取り囲んで大地の怒りを収めていくのが見えた。

「なんなの？」

「『緑の手』みたいに何かを産み出すことは叶わないが、搾取することに掛けては僕が得意とする分野だ。僕は………グランローズの生まれ変わりなんだよ」

クスクスと笑い声をあげて笑うレンは本当に美しかった。あの蕾の花が本当に咲き誇ったような微笑み。

そして甘い香りが鼻孔をくすぐった。

クロスが身体を震わせる。反射的に、なのか………風の精霊達が一斉にその甘い香りを国中に散らした。それはグランローズの開花を告げる香り。国中、いや世界中が安定して揺れが収まっていく。

精霊の様子で世界中が安定していくのが分かった。

でも命在る人間が『グランローズ』の代わりになるなんて花を守り通すよりも質が悪い。

顔色を読まれたように彼は言った。

「サリアが子供を産めば良いんだ。そうすれば『緑の手』と『王』が生まれる」

「そんなの続かないこと……レンが一番分かってるじゃない」

右手は拘束されたまま膝を付いた。それでもエイリが自分の身体をレンから無理矢理引き離す。エイリの身のこなしにレンが少し驚いた顔をした。それは魔道士の身のこなしではない。

「部外者は下がれ」

「部外者じゃない。アンタこそサリは玩具じゃない」

エイリが言うのに同調するようにサザンとクロスが自分達とレンを隔てた。炎と風による結界が一時的に自分達を隔離したのだ。

「サリア！」

エイリの腕が確かめるように自分を抱いた。縋り付くように彼の腕を取る。

「エイリ……どうしようっ！」

「逃げよう」

「でも……『緑の手』がレンの側にいないと世界が……」

結局一緒だ。今までとなんら変わらない。ただ、グランローズが意志を持っただけではないか。

震えるその腕をエイリの顔に伸ばした。エイリはそれごとギョツと抱きしめて小さく呟いた。なんとかする、って。

彼も必死に考えているのだろう。でもこれは人間がどうにか出来る範疇じゃない。

また、あの不自由な城に自分が入れば世界は守られる……。ただそれだけなの？

「サリア、話があります。とても、大事な話です」

低い声がその場に響いた。エイリもイリアも驚いた顔をした。

そう、サザンの声が二人にも聞こえている。

低い落ち着いた声でサザンは語った。

「貴方がたは些か力を持ちすぎた。サリア、イリア、レイニード、神籍に入りなさい」

「え？」

「地上に力を持ちすぎた人間が居るせいでこの世界のバランスが狂っているのです。貴方がたはもうこちらへ来なさい」

「待って…… サザン、それは死ねってこと？」

「私は昔、グランローズと呼ばれていました。サリア、貴方が私を鳥型に望むまで」

「お父様、友達が欲しいから鳥を飼いたい」

「姉様のように鳥が飼いたい」

「いっぱいお話が出来る友達が欲しい」

小さな頃の幼い願いは形を変えてここに叶っていた。グランローズは少しずつ力を失ってこのサザンと同化したのだらう。

そして少しずつレンにも取り込まれていったのかもしれない。

「私っ！そんなつもりじゃ……」

「サリア、貴方を責めるつもりはありません。グランローズと呼ばれていた精霊はただ貴方と一緒に居たかったのです。それは私もレイニードも変わらないのです。貴方が大好きなのです」

自分の我が侘は世界に混乱を招いた。いずれ来るはずの崩壊だったかもしれないが、それを早めたのはこの手だった。

諦めたように力を抜いた瞬間、エイリの腕が更に抱きしめる力を強くした。まるで行かないで、というように。

でも、今の話を聞いて自分はこのまま生きるわけにはいかなかった。つた。

「サザン…… 私とレンだけではダメ？ 姉様はこのままで」

「構いません。イリアは今『緑の手』としての力をあまり残していないようですから」

「じゃあそちらへ参ります」

エイリの腕を解こうとした。だがその力は思いの外強くて外せなかった。

「エイリ」

「お前は行ってはいけない！ サリは自分を生きるって、ちゃんと決

めただろ！」

「うん。エイリのお陰で楽しく生きられた」

「全然分かってない！お前は俺と一緒に生きるんだ！」

頭を攫うように抱きしめられた。その力強い腕が今までどれだけ頼もしかったか。どれだけ助けられてきたか、語ってたらそれだけで夜が明けてしまう。ずっと大好きだよって、一言思いを込めて耳元に呟いた。

だがヒンヤリとした腕が自分の頬をピシヤリと撃った。

イリアのか細い腕が自分を叩いたのだ。

「イリ……ア？」

「サリア、それは未練があるのなら止めなさい」

「そりゃ、あるけどっ！」

「神になるのは私が。私はむしろそのために生きてきたのです。本望ですよ」

「姉様っ！」

「ただ力が足りません。サリア、あなたの力を譲って下さい」

「嫌ですっ！姉様、そんなの嫌ですっ！」

「グランローズを咲かせるだけだと思っていた身体には出来過ぎた役目かもしれませんが、私はそれが良い。サリア……私は神になりたいのです」

そう言っただけイリアは自分の身体をエイリから受け取った。

愛情、屈折した優しさ、その想い総てが自分の上に降り注ぐ。

青白い光が移動していくように二人の間で強く光った。

嫌だといっぱい叫んだが次元を越える時の高周波のような音が全ての音を掻き消した。一緒に結界が消えてすでに状況を理解したような穏やかな表情のレンが立っていた。光が消えるとクロスがイリアの身体を拾うように一陣の風を巻き起こし霧散する。次にサザンがレンの身体を包み込んで燃やし尽くしていく。

その灰は風の精霊が世界中に蒔いていくのだらう。

灰はいずれ世界中の土地に取り込まれ、全ての生きとし、生ける

者達に換える。

空から降る優しい陽の光は人々を照らし、守り続ける。大地を濡らすその雨は地に降った灰と共に作物を育てていくのだろう。

世界はこれから巡っていく。

だがレンもイリアも、サザンもクロスもここからはいなくなった。その事実を確認するように静かになってしまった謁見の間でほんの少しの灰を握りしめて、突っ伏して泣き叫んだ。

エイリは横でずっと泣きやむまで頭を撫でていてくれた。

空に舞う鳥たちは葬送歌を唄う自分を伴奏するように鳴いた。

歌声はあの灰と共に世界に舞えば良い。

この世界はもう自由だと告げる声の代わりになればいい。

城を見渡せるこの丘の上で、何時間も何時間も歌い続けた。

ここに立って生きているって……天に届けばいい。

「サリア様、そろそろ戻りましょう」

「はい。今行きます」

金髪の白き鎧の騎士に向かって返事をした。だがまだ空を見上げる自分に彼は問いかける。

「まだ唄い足りないですか？」

「ええ……まあ。でも一年に一回の約束です」

「すみません。公務を整理出来ればもう少し時間をあげられるのですが……」

「色々大変だったのですから仕方ありません」

あれからグランローズ王国は一時崩壊の危機に陥った。王が立て続けに亡くなればそれも仕方ない。みすみす崩壊させることもないとユーリは自分を説得したのだ。王に向いている、と。

その言葉に騙されてあげて王に奉られて早一年。

世の中は至って平穏だ。

「ユーリ、私はやっぱり王には向いてないと思うのよ」

「何言ってるんですか？ご立派に治めておいですよ」

「だって私はグランローズ王家の『色』も持っていないし……」

「何を今更……『烏姫』！」

久々に呼ばれたその名に反射的に笑った。ユーリの躊躇いがちな手がこの一年で肩越しまで延びた髪の毛を掬う。

「貴方の髪の毛は……ほら、木々の色です。とても深い『緑』。

黒に見まごうほど『深緑』。ちゃんと『緑の手』の条件です」

「え？」

「って……貴方の『髪結い』が言っていました。私が気づけなかったのは悔しいですけどね」

梳かしてその髪の毛を見れば確かに緑の色合いを灯していた。自分の髪の毛が嫌いだったからちゃんとこんな風に見たことがなかったのだ。そういうえばエイリはいつも綺麗だと言ってきていた。瞳が潤んでしまいそうになるのを必死に堪えた。

世界はグランローズの花が無いことも当たり前になり、自分にとっても『緑の手』としての力が無くとも民を纏められることが日常となりつつある。精霊は未だに見えているが、治癒能力は一切イリアが持つていつてしまったようだった。

自分に出来ることは天候を読んだり、多少精霊に頼み事をするくらいで、グランローズ王国は『緑の手』や精霊グランローズが無くとも十分やっていける。

花の咲き誇るあの城には二人の神の恩恵があるのだから。

早馬を飛ばして半日。城下に戻ると重いマントを背負って民達の声援を受けた。

笑って手を振ると、皆が自分を称えた。

まるで今までの『緑の手』や王家の事を忘れたような国民の態度ももしかしたらイリアやレンのお陰なのかもしれない。

美しい水が流れる城下には元気な木々が生き生きと育ち、小鳥の鳴く声や人々の活気のある声に満ちあふれていた。

私はこの国を愛している。

でも、『サリア』は自由に生きる約束をずっと前にしてしまっている。

城門を潜り、民へのパフォーマンスが終了するとその重いマントを金髪の騎士に目隠し代わりに投げつけた。

「ユーリ、決裁のための判は執務室の机に入ってますよ。当面のこととはそれと一緒に書き記しておきました」

「サリア様っ!？」

良いタイミングだ。大きな爆発音が裏門から響き渡る。

あの腕の良い魔道士にはどんなに強固な城の守りも通用しない。更なる守りの固め方を議会で検討せねばと考えながら苦笑した。本当はこの人間離れた魔力の持ち主を味方にしてしまえば早いのだろうが、彼は自由な『サリ』の味方だ。女王・『サリア』の味方には決してならないだろう。

「サリ!行くぞ」

「うん!」

銀髪の男がそう言って快活に笑った。彼の馬に引つ張り上げられるとすぐに乱暴に走り始めた。その胸に口付けして再会を喜び合う。後ろからユーリ達騎士団が追い掛けて来る。彼の肩越しにそれを見遣った。

「ちゃんとまた戻りまーす!ユーリ、それまで城をよろしくねえ!」

「サリア様!」

「行つて来ます!」

大きく手を振ってユーリに言った。家臣はみんな呆れ顔をしたが、すぐに『烏姫らしい』と笑った。

渡り鳥のようなその男の手を取って、私は本当の自由になる。

黒き賢帝と緑の女神（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございました。

書いてる間中ハゲるかと思うくらい悩んで、できてみたら自分でも面白くないと思った駄作です。でも悩んだだけ思い入れが……。この話を作って少しでも成長できていたら良いなあ………と想っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7112q/>

髪結いと姫君

2011年2月7日01時40分発行